
多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育

第三回研究会

2018 年 1 月 18 日（木） 17 時 00 分～19 時 00 分

東京外国語大学 研究講義棟 419 号室 語学研究所

東京外国語大学 国際日本研究センター国際日本語教育部門主催 複合動詞プロジェクト

プログラム

■ 17：00～17:40

「中国語から見た日本語複合動詞 V-出す -対訳・誤用・正用データに基づいた分析-」

範 航宇（ハン コウウ）

東京外国語大学 大学院総合国際学研究科 博士前期課程

■ 17：40～18：10

「韓国語からみた日本語の複合動詞「V1+こむ」」

崔正熙（チェ・ジョンヒ）

東京外国語大学 大学院総合国際学研究科 博士後期課程

■ 18：10～18：50

「「V～こむ」の分類を再考する」

Laurence Newbery-Payton（ローレンス・ニューベリーペイトン）

東京外国語大学 大学院総合国際学研究科 博士後期課程

■ 18：50～19：00

全体討論

中国語から見た日本語複合動詞 V-出す

-対訳・誤用・正用データに基づいた分析-

東京外国語大学大学院総合国際学研究科 博士前期課程2年
範 航宇（ハン コウウ）

概要

本稿では、基礎資料における日本語の複合動詞「～だす」の中国語訳を考察し、中国語動補フレーズとの対応性が高く、直訳できる表現が多く、そして、なぜそれが実現できるのかについて、LCSをもって空間移動の「～だす」「V-出(来) chu1 (lai2)」を分析し、LCSの基本構造の一致とLCSにおけるSTATEの一致を要因として仮説を立て、それを顕在化の「～だす」と開始の「～だす」に検証することによって、「～だす」と「V-出(来) chu1 (lai2)」「V-起(来) qi3 (lai2)」の相違は主として、両言語における動詞の複合体系及びLCSにおけるSTATEの拡張のあり様にあると結論付けた。これは、学習者の作文データ及び正用コーパスの調査で二つの側面から実証される。第二言語としての日本語及び中国語の複合動詞・動補フレーズの習得において、両言語の間における動詞の複合体系の相違やそれぞれのLCSにおけるSTATEの拡張の在り方が重要となってくる。

他方、影山(1996)、佐野(2017)の理論に基づき、日本語の複合動詞「～だす」は基本的に状態変化を表すと言えよう。実証的なデータにおいて、日本語の「～だす」と中国語の「V-出(来) chu1 (lai2)」「V-起(来) qi3 (lai2)」の相違は主に状態変化表現に具現しており、それが学習者の誤用傾向及び正用データが示す傾向の要因であると考えられる。本稿の考察では、経路表現と状態変化表現という捉え方が有効性を示している。また、基礎資料における他の複合動詞に対する汎用性がある可能性を提示したが、他の表現への汎用性は検証が求められる。

1. はじめに

1.1. 語彙概念構造(LCS)

影山(1993,2013)の研究では日本語の複合動詞は2つの部門で作られるとし、それぞれ語彙的複合動詞、統語的複合動詞と呼んでいる。さらに語彙的複合動詞は項構造レベルにおいて複合が起こると主張しているが、同研究で主張している「他動性調和の原則」はすべての語彙的複合動詞に適応するというわけではない。(cf.松本1998)

典型的なものとして、「～出す」「～込む」「～去る」があるが、それに対して、影山はこれらの V2 は意味構造のレベルにおいて複合が起こるとしている。項構造レベルではないため、「他動性調和の原則」には従わないという。「～出す」「～込む」「～去る」などの V2 の特殊性および複合のレベルについて、松本 (1998), 由本 (2005) はすべての語彙的複合動詞の形成を語彙概念構造における合成として考えている。(cf.松本 2009)

他方、日本語の複合動詞の意味解釈は従来意味記述に頼る部分 (例えば姫野 (1999) の研究) が多いと思えるが、影山 (1993,1996,2013), 松本 (1998,2009), 由本 (2005), 陳 (2013) などの研究では語彙概念構造 (LCS)¹ を用いて V1 と V2 との間の意味関係を中心に分析されてきた。

由本 (2005) では、前述のように、すべての語彙的複合動詞の形成を語彙概念構造における合成として考えている。語彙概念構造レベルで影山 (1993) の語彙的複合動詞を 5 つのタイプに分けている。それぞれ並列関係, 付帯状況・様態, 手段関係, 因果関係, 補文関係と呼んでいるが、概ね以下のようなものである。

(1) a. 並列関係

泣き叫ぶ, 恋い慕う など

[[LCS1] AND [LCS2]]

b. 付帯状況・様態

持ち寄る, 遊び暮らす など

[[LCS2] WHILE [LCS1]]

c. 手段関係

切り倒す, 吸い取る など

[[LCS2] BY [LCS1]]

d. 因果関係

溺れ死ぬ, 流れ着く など

[[LCS2] FROM [LCS1]]

e. 補文関係

響き渡る, 書き落とす など

[LCS2... [LCS1]...]

このように、由本 (2005) は語彙的複合動詞の合成には「主語の義務的同定」と「Burzio の一般化に従った格素性の浸透」(cf.由本 2005) の制約が働いているが、(1) で示したように個々の動詞の LCS を AND/WHITE などの意味述語で連結することで行われると主張している。

本稿では、影山 (1993,1996,2013), 松本 (1998,2009), 由本 (2005), 陳 (2013) などの研

¹ 詳細は影山 (1996)、由本 (2005) に参照。

究で用いられている LCS は、従来の意味記述に比べ、より統一した枠組みを提供し、V2 の複合動詞後項動詞の意味を説明できると考えている。また、由本（2005）の考えに沿って、日本語の語彙的複合動詞の語形成はすべて語彙概念構造における合成として考える。本研究の対象となる日本語の「～出す」は後節でまた説明するが、影山（2013）のいう主題関係複合動詞とアスペクト複合動詞との2つの側面を持っている。以下影山（2013）の意味解釈のように、LCS を用いて意味構造の分析を試みる。

(2) a. 主題関係複合動詞の意味解釈

V2 の LCS の内部に V1 の LCS が組み込まれる。

b. アスペクト複合動詞の意味解釈

V1 の LCS 全体またはその一部の外側に V2 の意味が添加される。

1.2. 「～出す」の LCS

陳（2013）では「～出す」の語形成（意味構造における LCS 合成）の分析を通じて語彙的複合動詞や統語的複合動詞の間の連続性を論じ、「～出す」における V1 と V2 の意味関係は次の3種類にまとめ、そこには連続性・派生関係が存在していると結論付けている。

(22) a. 他動詞の「～出す」→手段複合動詞

b. 自動詞の「～出す」→補文関係複合動詞

c. アスペクトの「～出す」→統語的複合動詞（補文関係複合動詞）

意味構造における LCS 合成の分析を通じて語彙的複合動詞や統語的複合動詞の連続性を認めるとすれば、日本語の複合動詞の語形成はすべて語彙概念構造における合成として考え、そして「～だす」には一つの意味しかなく、同じ動詞が様々な動詞と複合するという立場をとることになるが、これら点では松本（1998）、由本（2005）の観点と一致する。しかしながら、陳（2013）の研究では、他動詞の「～だす」を手段複合動詞に分類しているが、移動を表す「～だす」と姫野（1999）のいう顕在化の「～だす」の区別をしていないのではないだろうか。詳しくは後節で説明するが、すなわちこの二種類の「～だす」の意味構造には相違があると思われる。

本論の立場をもう一度まとめると、複合動詞の意味は姫野（1999）に沿うが、意味構造の分析は由本（2005）、影山（2013）、陳（2013）の LCS を用いて試みる。

1.3. 中国語の動補フレーズ・複合動詞

中国語の統語構造は、動詞句では SVO 語順で動詞句の主要部である動詞は左にある。（この点では英語と同様である。）動詞の前に置かれる統語成分は、①主語、②副詞成分、③前置詞句が挙げられる。次に、動詞の後に置かれる統語成分は、①目的語、②補語（結果補語、

方向補語, 可能補語, 程度補語, 数量補語), ③疑問, 推量, 勧誘等のモダリティを表す終助詞である。(cf.望月,申 2011)

その中でも, 中国語の統語構造において重要な位置を占めているのは補語なのである。このように VO 語順の中国語では, 動詞句の主要部は左にあり, 動詞の後に結果述語がおかれることが多い。また, 中国語の構文における構成要素の間の結合関係には, 従来「主謂関係」「述賓関係」「述補関係」「偏正関係」「聯合関係」²があるとされてきた。中国語の複合語の生成において, 朱 (1999) によれば構成要素の結合は基本的には句構造, すなわち構文における構成要素の結合関係と一致する。「動詞+補語」型の複合 (前記の「述補関係」をなすフレーズ。本論では動補フレーズと呼ぶ。) は極めて生産性が高く, 表現のバラエティーに富んでいる。その多くが「先行事象+結果事象」を表すものとして捉えられる。「V-出 (来) chu1 (lai2)」と「～だす」に関連があるものを挙げると, 以下の下線部のようなものがある。

- (3) a. (結果補語³) 选出代表 <代表者を選びだす>
b. (結果補語) 找到/找出 <見つける/見つけだす>
c. (方向補語⁴) 走出教室 <教室を/から (歩いて) 出る>

1.3.1. 中国語の補語

中国語の補語は豊富な意味体系を持ち, 従来の研究では多く論じされてきた。しかしながら, 方向補語に関しては, その意味を整理し, 体系的に論じている劉月華主編 (1998) があるが, 補語全般について体系的な整理をしている文献はまだないようである。

朱 (1999) では中国語の「述補構造」すなわち「動補フレーズ」を「粘合式」「組合式」に分類している。それぞれ補語が直接述語後につく構造と中国語の「得」を用いた構造であると定義している。例をあげると, 前者に「写完」(書き終わる)「说清」(はっきり言う)のようなものがあり, 後者に「跑得快」(早く走る)「看得清」(はっきり見える)のようなものがある。さらに「粘合式」における補語に結果補語, 方向補語, 可能補語, 状態 (様態) 補語, 程度補語があるとしている。

(3) で見たように, 本研究の対象となるのは動補フレーズである。補語になるのは形容詞と動詞であり, すなわち「動詞+補語 (形容詞)」「動詞+補語 (動詞)」が許されるのである。(3) はこのタイプにあたる。「出 (来)」は単独では方向動詞とされており, 補語とし

² 「主謂関係」: いわゆる「主語+述語」の関係である。

「述賓関係」: 「賓」は賓語のことを指す。日本語学でいう「目的語」に相当する。

「述補関係」: 「述語+補語」の関係を目指す。

「偏正関係」: 「修飾語+被修飾語」の関係。

「聯合関係」: 「並列関係」。

³ 「-出 (来) chu1 (lai2)」は方向補語であるが, 本義の空間移動から, 意味が転じて結果義を表し, 結果補語と同様に機能する場合がある。(a, b.)

⁴ 従来, 趨向補語とも呼ばれてきた。本論では方向補語と称する。

ては従来方向補語とされてきた。このようなものは他に「進 jin4」「上 shang4」「下 xia4」などがあるが、「動詞＋補語（方向動詞）」になると、移動や方向を表し、前項動詞は手段、原因あるいは様態を表すとしている。ただし、このような方向補語は基本義が転じて結果義を表すことも可能なのである。その意味全体を整理しているのは劉月華主編（1998）の研究である。

劉月華主編（1998）では、中国語の方向補語の意味を詳細に記述している。研究目的は姫野（1999）と同様、外国語母語話者向けの教育への応用としている。日本語の「～出す」に対訳可能な方向補語「V-出（来）chu1（lai2）」「V 起 qi3（来）lai2」⁵に関しては、以下のようきく三種類に分けている。また、用法上とニュアンスの相違についても、例を挙げながら説明している。

（4）劉月華主編（1998）の「出 chu1」「起 qi3」の意味分類⁶

「出 chu1（来 lai2）」：

①方向義・空間移動：（cf. 姫野 1999 の空間移動類）

ウチからソトへの移動を表す。視点はウチとソトどちらに置いても良い。「出 chu1」の後ろには処所詞（場所を表すコトバ・フレーズ）がつくことで動作の起点あるいは終点を表す。この点では「出来 chu1 lai2」と同じである。

②結果義：（cf. 姫野 1999 の顕在化類）

「無」から「有」へ、隠れている状態から現れている状態への変化を表す。「出来 chu1 lai2」が持つ結果義と同じである。

「起 qi3（来 lai2）」：

③状態義：（cf. 姫野 1999 の開始類）

新しい状態に入ることを表す。「起 qi3」は動詞としか結合しない。「起 qi3（来 lai2）」は動詞と形容詞の後ろにつくことで新しい状態に入ることを表す。動詞の後ろにつく場合は新しい動作が開始することを表す。一般的には、静態から動態への変化である。

（劉月華主編 1998：217-250,317-381 より要約）

このように、劉月華主編（1998）では「V 出 chu1（来 lai2）」「V 起 qi3（来 lai2）」の意味を個別に分類し、個々の用法上の相違などを詳細に記述している。また、「起 qi3（来 lai2）」に関しては、ある角度から物事を述べるという談話（discourse）機能が備えていると述べているが、先行研究では「起 qi3（来 lai2）」の談話機能は状態義から派生したものであるとされている。（cf. 曾 2014：41-50）

⁵ 第2節に参照。

⁶ 日本語訳は筆者によるものである。

1.3.2. 中国語の複合動詞

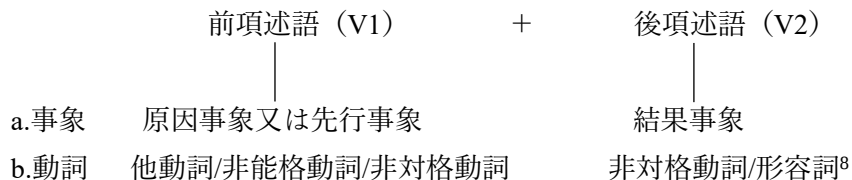
湯 (1989:151-154) は、中国語の複合動詞を、その内部構造から、以下のように五分類している。

- (5) ⁷ a. 「動詞+目的語」型 (Predicate-Object Type) :
 种地, 结婚, 充电, 动员
 b. 「動詞+結果補語」型 (Predicate-Complement Type) :
 推开, 打破, 喊哑
 c. 「副詞+動詞」型 (Modifier-Head Type) :
 迟到, 热爱, 瓦解
 d. 「主語+述語」型 (Subject-Predicate Type) :
 面熟, 头疼, 眼熟, 性急
 e. 「並列型」 (Coordinative Type) :
 发展, 改变, 成立, 丰富, 充实

望月,申 (2011:3-4) によれば、この五種類の複合動詞の語順をみると、先に触れた「主謂関係」「述賓関係」「述補関係」「偏正関係」「聯合関係」、すなわち中国語の句構造の語順と合致している。この五種類の複合動詞のうち、中国語の複合動詞の形成において最も卓越性を示し、生産性が高いのは、「動詞+結果補語」型の結果複合動詞であり、「述補関係」に対応する型である。また、日本語の補文関係の複合動詞に対応することが多いと述べている。
(e.g. <-完: ~終わる/終える><-光: ~尽くす/尽きる>, cf. 望月,申 2011)

このように、望月,申 (2011:4) では、中国語の結果複合動詞は事象構造と前項述語と後項述語の組み合わせという視点からみると、以下のように一般化されるという。

(6) 望月,申 (2011:4): 結果複合動詞の事象構造及び述語組み合わせ



このように、中国語の複合動詞の多くは「先行事象+結果事象」という時間順が最も卓越性を示す。日本語と中国語の複合動詞の語順には、並列型を除き二種類の原則が働いている。一つは「句構造と語構造の一致原則」であり、すなわち句構造における語順がそのまま複合

⁷ 望月,申 (2011:3) に参照。

⁸ 中国語においては、形容詞、非対格動詞の区別が明確ではない。(望月,申 2011:4)

動詞の語順に反映される。もう一つは「時間順原則」⁹であり、事象の起こった順に動詞を並べるという原則である。日本語複合動詞の語順では「句構造と語構造の一致原則」が最も卓越性をもつ一方で、中国語においては「時間順原則」が最も卓越性をもつと望月,申(2011)は結論付けている。

以上見てきたように、VO 語順の中国語では、動詞句の主要部は左にあり、動詞の後に結果述語がおかれ、その中でも「動詞+補語」型の複合（動補フレーズ）は極めて生産性が高く、表現のバラエティーに富んでいる。その多くが「先行事象+結果事象」を表すものとして捉えられる。そして、複合動詞の形成において「先行事象+結果事象」という時間順が最も卓越性を示す。中国語の動詞句の形成では「先行事象+結果事象」という時間順が機能する場合が多いと言えよう。

また、Tai (1985) が述べたように中国語では「臨摹性原則」(Iconicity Principle) より典型的、普遍的に働いており、中国語は結果重視言語であると考えられる。

本研究で対象となる「V 出 chu1 (来 lai2)」「V 起 qi3 (来 lai2)」は従来動趨式（動詞+方向補語のフレーズ）とされており、曾 (2014) などの研究では、動趨式は「臨摹性原則」(Iconicity Principle) に従うという。したがって、「V 出 chu1 (来 lai2)」「V 起 qi3 (来 lai2)」の意味構造の分析は基本的に「先行事象+結果事象」という枠組みに従って行うことにする。

2. LCS から見た「～だす」における日本語と中国語の対訳

東京外国語大学・国際日本研究センター国際日本語教育部門主催、多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育第一回研究会で発表した「中国語訳から見た「～だす」における日本語と中国語の対応」では、姫野 (1999) の「～だす」の複合動詞の意味分類を従い、基礎資料¹⁰における後項動詞が「～だす」である複合動詞の中国語訳から、日本語の「～だす」が表す意味が中国語ではどのように表現されるのかについて考察し、またその対応関係をまとめている。以下にその結果を再掲する。

本節では、基礎資料における「～だす」が中国語訳においてどのような表現になるのかについて考察し、LCS をもってその統語構造、複合体系及び意味構造の分析をし、整理を行う。

さらにその間の直訳条件を提示し、日本語の複合動詞と中国語の動補フレーズの相違及びその要因を考察する。日本語の複合動詞と中国語の動補フレーズは統語構造、複合体系が異なるものの、その間の直訳が可能な要因として LCS の基本構造と LCS における STATE

⁹ 先行文献では、「臨摹性原則」(Iconicity Principle)「順序扫描」(Sequential Scanning)とも呼ばれている。Tai (1985) では、人類の言語の普遍的な原則とし、中国語ではより典型的、普遍的に働いていると述べている。また、曾 (2014) などの研究では、動趨式（「動詞+方向補語」のフレーズ）は「臨摹性原則」に従うという。

¹⁰ 「日本語複合動詞多言語翻訳の基礎資料 ver.1」を指す。

の一致が考えられる。

表 1 「～だす」に対応する中国語表現

中国語訳パターン	対応する日本語の「～だす」
V-出（来/去） 「動詞＋方向補語」（動補フレーズ）	溢れ出す 逃げ出す 飛び出す 取り出す 踏み出す 持ち出す①② ¹¹ 貸し出す 乗り出す③ 差し出す 突き出す①②③ 貼り出す 作り出す 聞き出す
V-起（来） 「動詞＋方向補語」（動補フレーズ）	持ち出す② 思い出す 言い出す 降り出す
开始-V 「動詞＋動詞」（動詞句）	言い出す 降り出す
「副詞＋動詞」（動詞句） （または単独動詞などの固定表現）	貸し出す 乗り出す①② 突き出す④ 怒り出す

表 2 「～だす」と「V-出 chu」の意味領域

	～だす	V-出 chu1（来 lai2）
空間移動	○	○
（表だった場への移動）	○	×
顕在化	○	○
完了・結果	×	○
始動・開始	○	×

影山（1996,2013）、由本（2005）、陳（2013）などでは LCS を用いて複合動詞の意味構造を分析している。陳（2013）では「～だす」は語彙概念構造レベルの合成であると考え、単独動詞「出す」の意味に基づき、複合動詞の「～だす」の LCS を以下の通り提示している。

(7) 「～出す」の LCS：

LCS2：[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT -OUT¹²]]

[LCS1]

（陳 2013：59-60）

[X] CAUSE [Y]

¹¹ ①②は基礎資料における意味分類である。

¹² 陳（2013：59）は元々基本義に基づき BE NOT AT-w/BE AT-z と設定しているが、「出す」における「外部への変化」の結果性を「OUT」に抽象化している。

この図式を略すれば LCS2 : [[LCS1] CAUSE [y BECOME [y BE AT -OUT]]] になるが、要するに LCS1 は使役動詞である LCS2 の上位事象¹³を修飾する働きを発揮すると考えられる。すなわち、V1 は V2 という複合事象の一段階として使役行為が行われる際の具体的執行手段であると分析している。(cf.松本 1998 : 52-53, 陳 2013 : 60) 一方、姫野 (1999) では、他動詞類の「～だす」の意味は対象の移動を表すとされているが、V1 の修飾関係により、以下の四つに分けられている。(8) a, b, c はいずれも V1 が原因事象・先行事象として、V2 を結果事象として捉えられる。ところが、(8) d に関しては、修飾関係が曖昧のため、(7) の LCS のようには分析しにくいであろう。

- (8) a.方法：～することによって出す
b.状態：～した状態を出す
c.目的：～することすなわち外界に出す（開放，外部利用等）
d.分析不可能なもの： 乗り出す 差し出す

他方、中国の複合動詞・動補フレーズの生成は統語的な制限は日本語よりは緩いと思われ、「先行事象＋結果事象」という時間順が最も卓越性を示す。Tai (1985), 曾 (2014) の考えを踏まえ、語彙概念構造における合成であると考えられる。

「出 chu1」は単独では移動動詞とされ、後ろに場所がつくことで、移動物がある場所から出て既にその場所に存在しないという意味を表す。「出 chu1」の LCS は[y BECOME [y BE AT -OUT]]と想定する¹⁴。さらに、Tai (1985), 曾 (2014) の観点からすれば、中国語の「動詞＋方向補語」のフレーズは望月,申 (2011) のいう「先行事象＋結果事象」という時間順に従うことが多いと思われる。前項動詞と述語との因果関係が強く読み取れることができ、したがって「V-出 chu1 (来 lai2)」の LCS は以下のように想定できる。

- (9) 「V-出 chu1 (来 lai2)」の LCS :
[LCS1] CAUSE [LCS2]
 [y BECOME [y BE AT -OUT]]
[X] CAUSE [Y]

このように、最終的には「～だす」と「V-出 chu1 (来 lai2)」の LCS はほぼ同じ形 ([X CAUSE Y]) になっているが、ここで注意しておきたいのは、両者の複合体系が同様であるのではなく、「～だす」の LCS に因果関係 (CAUSE) が存在し、「先行事象＋結果事象」と

¹³ 上位事象と下位事象は影山 (1996,2013) などでは使われる用語であるが、望月,申 (2011) のいう「先行事象」「結果事象」とは同じものであると思われる。

¹⁴ 影山 (1996 : 84) の位置変化・状態変化の LCS に参照。

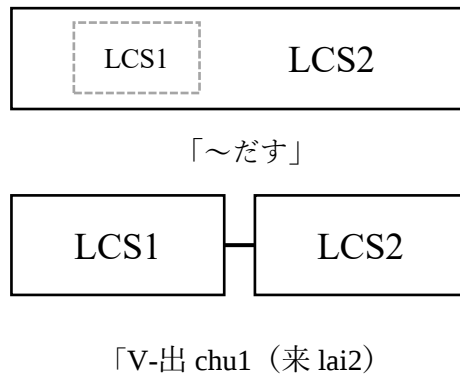


図 1¹⁵ 「～だす」と「V-出 chu1 (来 lai2)」の複合

他動詞の「～だす」は以上のように解釈できるが、自動詞類は(10)でみられる「取り出す⇔出す」のような言い換えはできない。つまり、「V1+出す≠出す」ということであるが、自動詞の「～だす」の LCS は他動詞類の「～だす」の LCS とは違うということを示唆している。陳(2013: 60-61)では、自動詞の「～だす」の LCS を提示している。そして、(13)では x が鳥のような有生物あるいは意志を持つものであれば、外項 x の存在が認められるが、水のような意志を持たないものの場合は外項が具体的に何を指しているのかは不明であり、非対格自動詞の「～だす」は(14)のような外項のない LCS2 を有すると論じている。

(13) LCS2 : x CAUSE [BECOME [[LCS1] BE AT **-OUT**]]

(陳 2013 : 60)

(14) 非対格自動詞の「～出す」の LCS

LCS2 : BECOME [[LCS1] BE AT **-OUT**]]

(陳 2013 : 61)

(13) (14) を利用すれば、基礎資料における「逃げ出す」「飛び出す」「溢れ出す」の LCS は(15)に示すことができる。

(15) LCS2: x CAUSE [BECOME [LCS1] BE AT **-OUT**]]

ライオン CAUSE [[逃げ] [出す]]

鳩 CAUSE [[鳩が飛ぶ] [出す]]

LCS2: BECOME [[LCS1] BE AT **-OUT**]]

[[川の水が溢れる] [出す]]

¹⁵ 点線は比較的緩い構造を示す。

さらには、これらの複合動詞の中国語訳の LCS は (16) に示すことができる。一見「溢れ出す」の意味構造は[[LCS1] CAUSE [LCS2]]の構造とは異なるあるが、前に見たように、(14)の構造は元々こうなっているわけではなく、陳(2013)が指摘しているように、(13)の外項が具体的に何を指しているのかが不明の場合、外項の存在は認めず最終的には(14)の構造になるというわけなのである。(16)では(13)の構造と(9)「V-出 chu1 (来 lai2)」のLCSとの類似性を示している。

(16)	[LCS1]	CAUSE	[LCS2]
			[y BECOME [y BE AT -OUT] ... (9)]
	[獅子逃]	CAUSE	[獅子出来]
	[水溢]	CAUSE	[水出来]
	[鸽子飞]	CAUSE	[鸽子出来]
	[X]	CAUSE	[Y]
	LCS2:	x CAUSE	[BECOME [LCS1] BE AT -OUT] ... (13)]
		[X]	CAUSE [Y]

このように、複合の体系が異なるものの、類似した意味構造を持つ「～だす」の「V-出 chu1 (来 lai2)」の間の対訳は容易にできる。以上の考察をまとめると、同じ基本構造([X CAUSE Y])を持つことが複合体系の違う日本語の複合動詞と中国語の動補フレーズとの間の直訳が可能な要因であると考えられる。

では、空間移動を表す「～だす」で中国語の動補フレーズをもって訳せないものどのような意味構造を持っているのであろうか。基礎資料では、「持ち出す」②、「乗り出す」①②、「突き出す」②の表現が中国語の動補フレーズに対応しない。これらを考察しよう。

「持ち出す」②は、空間移動を表すものではなく、姫野(1999)のいう「開始」を表している。詳細は後節に譲る。

一方、乗り出す①の意味は基礎資料では(17)である。訳出では動補フレーズだけでは表現できないため、別の動詞で表現しているが、それでもまだカバーできない部分が残っている。

(17) 乗り出す①：船などに乗って、(困難が予想される)海に出て行く。

(17)で下線をひいた部分は中国語では動詞句や副詞で表現できるが、動補フレーズ及び複合動詞ではできない。①は空間移動だけではなく、行先の空間及びその空間に到達するまでの過程に対する心理的な評価について述べていることがわかる。これらの意味で空間移動は「V-出 chu1 (来 lai2)」が持つ[[LCS1] CAUSE [LCS2]]という構造に埋め込むことができるが、心理的な評価の部分はできなさそうである。しかし、よく考えると、困難が予想され

るといった心理的な評価は海という行先の空間へのものなのである。すなわち、自分の領域外、ソトの世界へ行くことは困難が予想されるのは常識としては普通であり、日本語母語話者という言語コミュニティは「海」をソトの世界であると考えているから、そこへ行くことは困難が予想されるのではないであろうか。中国語では特にこういったソトの概念の拡張がないから直訳に困難を感じられると思われる。以下のように LCS に埋め込むことで解釈できるのではないであろうか。

(18) 乗り出す①の LCS :

LCS2 : [LCS1] CAUSE [y BECOME [y BE AT -OUT(海)]]
[X] [Y]

(18) では乗り出す①の LCS は中国語の動補フレーズとの類似性を示しているが、中国語「V-出 chu1 (来 lai2)」ではソトの概念の拡張、すなわち状態を表す概念に当たる部分[y BE AT -OUT(海)]が存在しないため、直訳できないと考えられる。

また、「突き出す」②では、「～だす」が姫野(1999)の「表だった場への登場」を表している。これも(18)をもって説明できる。すなわち、「～だす」を使う際、物理的であれ心理的であれ必ず何かの領域・空間が想定されて、その領域・空間の想定は言語間で異なる。ここでは「交番」を「表だった場」という領域・空間の想定：-OUT(警察・交番)は中国語に直訳ことが困難であると考えられる。他方、「貸し出す」「貼り出す」にもこういった領域・空間の想定がかかわっているが、中国語にも同じような概念：-OUT(公的・公開)が存在するため、直訳は可能であると考えられる。

しかしながら、以上ではこういった言語コミュニティで想定された特殊な空間を-OUT(z)のように安易に記しているが、その本質は何なのか。「～だす」の LCS では、空間移動の行き先に移動物が存在することを[y BE AT NOT BE AT-w/BE AT-z (陳 2013 : -OUT)]に記し、その前には BECOME という意味述語がある。BECOME は状態変化を表すものであり、いってみれば[y BE AT NOT BE AT-w/BE AT-z]は変化後の状態である。影山(1996)では状態(STATE)という範疇を設け、物理的位置と抽象的状态はその下位概念としている。すなわち、[y BE AT -OUT]も[y BE AT -OUT(z)]も状態変化の下位概念であると考えられる。

以上見てきたように、[y BE AT -OUT]は本質的には変化後の状態である、そこには物理的な空間だけでなく、言語によっては他の空間あるいは状態も想定される場合があると言える。本論では[y BE AT -OUT]のような意味述語 BECOME の後ろにつく、変化後の状態を表す部分を STATE と称する。とすれば、「～だす」の LCS と「V-出 chu1 (来 lai2)」の LCS は以下のように記述できる。

(19) 「～だす」:

LCS2: [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME STATE]

[LCS1]

「V-出 chu1 (来 lai2)」:

[LCS1] CAUSE [LCS2]

[y BECOME STATE]

基礎資料における訳出の状況を対照すると、日本語の複合動詞と中国語の動補フレーズの間の直訳には、[y BEAT -OUT]といった状態を表す概念の一致も求められるように思える。「乗り出す①」「突き出す②」では中国語では海と-OUT, 交番・警察と-OUT がリンクしておらず、その STATE が中国語では存在しないため直訳できないが、「貼り出す」と「突き出す②」は同じく-OUT の概念が他の領域の概念をリンクさせているのに、(31) 1.の「貼り出す」は直訳が可能である。掲示版に貼ると情報が公衆・外部の者も触れることが可能になることにリンクするのは両言語のコミュニティーが共通に持っている認識であり、すなわち基本構造が同様の上で共通な STATE が存在し一致するため直訳できると考えられる。

このように、LCS における STATE の一致が日本語の複合動詞と中国語の動補フレーズとの間の直訳が実現する要因であると考えられる。

他方、「乗り出す②」「差し出す」のような表現は翻訳が可能であるが、日本語のニュアンスを完全に表現することはできない。姫野(1999)ではこれらを分析不可能な類に分けており、LCS では扱いにくいと思われるが、姫野(1999: 93)では“「乗り出す」は主体が自身を外部や前面に出す動作であるが、転じて、社会的行動に踏み切ることを表す場合は、「を」格の名词が略される。「さしだす」の「さす」は、接頭語で、ある意図をもって相手の前面に何かを出すことを強調する。”と述べている。つまり、「乗り出す②」の意味は「身を乗り出す」ような表現に由来するものである。そうすれば「あることに積極的に(意欲的に)関与する。」という意味はとある場に身を乗り出すこと、すなわち空間移動を表す-OUT の概念を別の領域の概念にリンクさせてはじめて出るものであると考えられるのではないであろうか。中国語では、こういったリンクの仕方が存在しないため、STATE の一致に違反し、直訳ができないわけなのである。

「差し出す」に関しては、「さし」が接頭辞とされており、中国語では相当するものはないと思われる。基礎資料における訳出は動補フレーズになっており、一見対応しているようであるが、これはあくまでも動補フレーズでは[X CAUSE Y]の基本構造が要求され、「手を出す」動作の描写に適切な動詞を選んで「出 chu1」と結合したものであり、「差し出す」のニュアンスは出てこない。したがって、「差し出す」の場合は訳語としての「伸出/递出」と同じ基本構造を持ち、さらに物理的な空間移動を表しているので翻訳が可能である。ただし、「さし」のような接頭辞の意味は訳語に反映されない。

以上は空間移動の「～だす」と「V-出 chu1 (来 lai2)」の LCS を考察し、両者の複合体系

は違うものの、類似した基本構造[X CAUSE Y]を持つについて述べた。さらに空間移動を表す「～だす」の訳出を通じて、日本語の複合動詞と中国語の動補フレーズとの間の直訳条件を考察した。その直訳条件をまとめると以下の通りである。

(20) 日本語の複合動詞と中国語の動補フレーズとの間の直訳条件：

- ①LCS の基本構造が一致すること。
- ②LCS における STATE が一致すること。

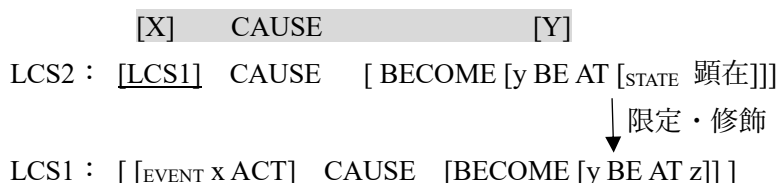
本節で考察したように、空間移動の「～だす」は多くの場合、「V-出 chu1 (来 lai2)」と直訳できる。直訳できない表現には概ね LCS における STATE の相違が見られるのである。全体的に見れば、対応性が高いと言えよう。これらは (20) の直訳条件から説明できる。

顕在化を表す「～出す」に関しても、同様に検証できる。以下に顕在化を表す「～出す」の LCS 及び意味的に対応すると思われる中国語の結果義の「V-出 chu1 (来 lai2)」の LCS を示す。

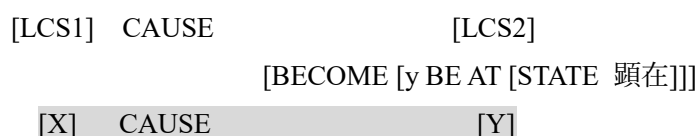
「～だす」の顕在化及び「V-出 chu1 (来 lai2)」の結果義には著しく相違があるが、基礎資料では全ての「～だす」が中国語の動補フレーズに直訳することが可能である。両言語で状態変化を表す手段が異なるケースも存在するが(思い出す)、別の動補フレーズを用いて直訳することができる。このような対訳の状況は (21) と (20) の直訳条件を用いて説明できる。

開始を表す「～だす」に関しても、構造的には、中国語の動補フレーズとは対応しないように見えるが、LCS の基本構造及び STATE の部分が一致した状態義を表す「V-起 (来) qi3 (lai2)」には直訳が可能である。一方、類似した構造を持つ他の表現には翻訳ができるものの、「～だす」の意味を完全に表現するには他の要素によって STATE を補足することが必要となる。この類の「～だす」の対訳状況も (22) と (20) の直訳条件で説明することが可能である。

(21) 顕在化の「～だす」の LCS：



結果義を表す「V-出 chu1 (来 lai2)」の LCS：



(22) ¹⁶開始を表す「～だす」の LCS :

LCS2 : [BECOME [[LCS1] BE AT -SUDDEN START]]
[BECOME [[LCS1] BE AT STATE]]
[BECOME [Y]]

状態義を表す「V-起 (来) qi3 (lai2)」の LCS :

[BECOME [[LCS1] BE AT -SUDDEN START]]
[BECOME [[LCS1] BE AT STATE]]
[BECOME [Y]]

このように、(21) (22) で示した LCS 及び表 1 の対訳状況の考察により、日本語の複合動詞「～だす」と中国語の動補フレーズ「V-出 chu1 (来 lai2)」 「V-起 (来) qi3 (lai2)」は統語構造、複合体系が異なるものの、その間の直訳が可能な要因としては LCS の基本構造 ([X CAUSE Y]) と LCS における STATE の一致が考えられる。両者の相違は、根本的には日本語と中国語の動詞の複合体系及び LCS における STATE の拡張のあり方にあると考えられる。実際、基礎資料における他の複合動詞、例えば「～ぬく」「～きる」とその中国語訳でも以上のような現象が見られる。日本語の複合動詞と中国語の動補フレーズ・複合動詞との相違は主としてその複合体系及び LCS における STATE の拡張のあり方にあると言えよう。

他方、前に影山 (1996) では状態 (STATE) という範疇を設け、物理的位置と抽象的状态はその下位概念としているのについて触れた。本節の考察で示したように、「～だす」の LCS において BECOME という意味述語があり、根本的には状態の変化を表している。状態変化はバラエティーに富んでおり、表現によって STATE が異なるが、いってみれば、空間移動として捉える状態変化も顕在化として捉える状態変化もその下位概念なのである。

佐野 (2017 a,b) では、時間の経過は動きによって認識されると述べ、人間は時間を直接観測できないため、モノの変化を知覚・感覚することで、動きを認識すると主張している。さらには、モノの捉え方に二種類存在し、それにより時間経過の表現として、モノの外形が変化せず、位置が変化することで時間の経過を表現する仕方と、外形を含めた性質や属性の違うモノが存在する連続体としての単空間が複数連鎖することで時間の経過を表現する仕

¹⁶ (22) では「V-起 (来) qi3 (lai2)」の LCS と開始を表す「～だす」の LCS を示している。両者とも基本義として、元々[X CAUSE Y]のような基本構造を備えていると思われるが、最終的に (22) で示したような構造になっている。これは LCS が何らかの操作・変化を受けて最終的にこういった構造になっていると考えられるが、本論では深く触れないことにする。この点に関して、考えられるのは非対格自動の「～だす」にみられるような外項を抜ける操作のようなものであるが、実際に陳 (2013) の研究でも開始を表す「～だす」の LCS を提示する際、意味から補文関係になっていると推測しているのであり、拡張のメカニズムについて触れていない。

方があると主張し、前者を経路表現、後者を状態表現と称している。また、これらは二分するものではなく、位置変化と状態変化の前景化状況によって、経路表現と状態表現のどちらの意味が優勢かが決まるという。影山（1996）の考えとは出発点が異なるものの、動きの表現に下位概念がある点では一致している。

本節の考察では、空間移動には両言語で大差がないのに対して、「～だす」の顕在化と「V-出 chu1（来 lai2）」の結果義には著しく相違がある¹⁷と考えている。また、顕在化の「～だす」と空間移動の「～だす」の LCS に見られた相違からすると、同質的なものとして扱わないほうが良いのではないと思われる。

影山（1996）、佐野（2017a,b）の観点を考慮に入れれば、「～だす」は V2 が状態変化を表す要素であり、LCS における STATE には、[-OUT],[STATE 顕在],[SUDDEN START]のような下位概念が存在し、文脈により前景化の有様が変わり、「空間移動」「顕在化」「開始」といった具体的な意味のどちらに捉えることになる。すなわち位置変化が優勢なのか、隠れていた状態から目に見える状態への変化、あるいは動いていない（静的）状態から動的状態への変化が優勢なのかにより「空間移動」「顕在化」「開始」といった具体的な意味が現れたと考えられるのではないであろうか。さらに言えば、[-OUT]のような位置変化が優勢の場合は空間内の経路表現として捉えられ、[STATE 顕在],[SUDDEN START]のような状態変化が優勢な場合は状態変化表現として捉えられるのではないかと考えられる。基礎資料における日本語の「～だす」と対応すると思われる中国語の「V-出（来）chu1（lai2）」を見る限り、その相違は、主として「顕在化」と「結果義」の表現範囲の相違及び「V-出（来）chu1（lai2）」が開始・始動の意味を表せないこと、すなわち状態変化表現に具現していると言えよう。ここで経路表現と状態変化表現という捉え方は有効性を示す。

実際、姫野（1999：97）が言及している以下の例からも以上のように「～だす」は基本的に状態変化を表し、LCS における STATE の前景化の状況により、具体的意味が変わってくると捉える妥当性を感じるのである。

(23) a. 「走って出て」か「走り始めてか」？

「長池が四回、死球を左手に受けてバツタリ倒れたとき、阪急ベンチからはなんともいえない悲鳴がもれた・・・しかし、長池は元気に立ち上がり、一塁へ走り出してナインをホットさせた。」（新聞）

b. 「にじんで出て」か「にじみ始めて」か？

「幹の周りにナイフで斜めにキズをいれる。と、ミクル色の樹液がにじみ出し、キズ跡を伝って素焼きの容器にしたり落ちる。」（新聞）

（姫野 1999：97 体裁は引用者による）

¹⁷ 紙幅の関係で省略する。以下「顕在化の「～だす」と空間移動の「～だす」の LCS に見られた相違」も同様。

姫野(1999:97)は上の例ではどちらの意味か決めかねるが、むしろ両方の意味を兼ねていと言ったほうがいいかもしれないと述べている。これは「～だす」は基本的に状態変化を表し、文脈では STATE の前景化の状況がはっきり読み取れないためであると考えられるのではないであろうか。

3. 対訳・誤用・正用表現をつなげて

前節では、基礎資料における日本語の複合動詞「～だす」の中国語訳を考察し、中国語動補フレーズとの対応性が高く、直訳できる表現が多く、そして、なぜそれが実現できるのかについて、LCS をもって空間移動の「～だす」「V-出(来) chu1 (lai2)」を分析し、LCS の基本構造の一致と LCS における STATE の一致を要因として仮説を立てた。さらには、顕在化と開始の「～だす」及び中国語での対訳表現にも同じ仮説が適用できることが観察されたので、日本語の複合動詞と中国語の動補フレーズの直訳条件は(20)で提示したようなものではないかと考えている。このように LCS での分析を通じて、日本語の「～だす」の基本的に状態変化を表すという本質が徐々に見えてきて、対応すると思われる中国語の「V-出(来) chu1 (lai2)」, または「V-起(来) qi3 (lai2)」との相違が明らかになっている。その相違は主として、両言語における動詞の複合体系及び LCS における STATE の拡張のあり様にあると結論付けた。また、基礎資料における他の複合動詞に対する汎用性がある可能性を提示した。

概ね直訳ができる表現は学習者にとって理解にはあまり困難が伴わず、逆に直訳ができない場合の多い表現は困難を感じられると思われるが、紙幅の関係で詳細は省略するが、前節の考察の中では、「～だす」と「V-出(来) chu1 (lai2)」は複合体系が異なる上で、「～だす」の顕在化と「V-出(来) chu1 (lai2)」の結果義、すなわち STATE の拡張に大きな相違が存在することも考えている。要するに、動作の自然の結果を一次的なものとするれば、顕在化の本質は二次的な結果であり、「V-出(来) chu1 (lai2)」の結果義は二次的なものだけでなく、一次的なものも多く含むと考えられる。日本人中国語学習者にとって「V-出(来) chu1 (lai2)」の結果義は特に理解が困難な表現であると予想される。

このことは、日本人中国語学習者の作文データでは、「空間移動」の「V-出(来) chu1 (lai2)」は正用率が高いのに対し、「結果義」の「V-出(来) chu1 (lai2)」は正用率が比較的低く、非用による誤りが顕著であることから検証される。

前節の対訳と学習者の誤用を合わせて見ると、第二言語としての日本語複合動詞及び中国語の補語の習得においてより効果的な学習をするには、複合の体系の相違やそれぞれの LCS における STATE の拡張の在り方が重要となってくると考えられる。

一方、前節では、日本語の「～だす」と対応すると思われる中国語の「V-出(来) chu1 (lai2)」の相違は主として、両言語の動詞の複合体系及び LCS における STATE の拡張のあり様にあると述べている。まず、両言語の動詞の複合体系の相違から見れば、両言語での単独動詞の

性質により、中国語の動補フレーズでは[X CAUSE Y]という LCS の基本構造がほぼ強制的に要求されており、「～だす」と同じ状態変化を表すのに「V-出(来) chu1 (lai2)」が多く出現する。それに対し、日本語の複合動詞「～だす」は最終的には[X CAUSE Y]という基本構造になることがあるが、[X CAUSE Y]という基本構造強制的に要求されるというわけではない。次に、LCS における STATE の拡張の相違からは、具体的には、「顕在化」と「結果義」の表現範囲の相違及び「V-出(来) chu1 (lai2)」が開始・始動の意味を表せないこと、すなわち状態変化表現に具現している。とすれば、正用表現では、全体的には中国語の「V-出(来) chu1 (lai2)」は日本語の「～だす」より頻繁に出現するはずであり、さらに言語間で状態変化表現における傾向上の差異が予想され、結果義の「V-出(来) chu1 (lai2)」は顕在化の「～だす」より頻繁に使われる表現のはずなのである。

NINJAL-LWP for TWC (NLT) と国家言語委員会現代漢語コーパスでの正用データでは、中国語の「V-出(来) chu1 (lai2)」 「V-起(来) qi3 (lai2)」は日本語の「～だす」より、頻繁に使われている表現であることがわかる。さらに状態変化表現において結果義が大部分を占め、結果義の「V-出(来) chu1 (lai2)」は顕在化の「～だす」より頻繁に使われる表現である。前記の予想は検証される。

また、正用データがこのような傾向を示すということから、より表現範囲が広く、さらにより頻繁に使われている結果義の「V-出(来) chu1 (lai2)」は日本人中国語学習者にとっては使用上または意味の理解において困難が感じると推測できる。誤用データで日本人中国語学習者の「V-出(来) chu1 (lai2)」の使用は非用傾向にあり、なお「空間移動」の「V-出(来) chu1 (lai2)」は正用率が高いのに対し、「結果義」の「V-出(来) chu1 (lai2)」は正用率が比較的低く、非用による誤りが顕著であることから実証される。

このように、前節で述べた結論は、学習者の作文データ及び正用コーパスの調査で二つの側面から実証される。また、実証的なデータにおいても日本語の「～だす」と中国語の「V-出(来) chu1 (lai2)」 「V-起(来) qi3 (lai2)」の相違は主に状態変化表現に具現しており、それが学習者の誤用傾向及び正用データが示す傾向の要因であると考えられる。ここでも経路表現と状態変化表現という捉え方は有効性を示すと言えよう。

以上で見てきた対訳・誤用・正用表現の考察をつなげて、以下(23)で示す結論が得られるであろう。

- (23) A. 日本語の複合動詞「～だす」は基本的に状態変化を表す。意味的に対応すると思われる「V-出(来) chu1 (lai2)」 「V-起(来) qi3 (lai2)」との相違は根本的には日本語と中国語の動詞の複合体系及び LCS における STATE の拡張のあり方にある。このような相違からは、日本人中国語学習者の作文における「V-出(来) chu1 (lai2)」に誤用が生じ、全体的には非用傾向にあり、さらに結果義の「V-出(来) chu1 (lai2)」は非用傾向が顕著であることが解釈できる。
- B. 第二言語としての日本語及び中国語の複合動詞・動補フレーズの習得において、

両言語の間における動詞の複合体系の相違やそれぞれの LCS における STATE の拡張の在り方が重要となってくる。

- C. 「V-出(来) chu1 (lai2)」では、LCS における STATE の前景化の状況による経路表現と状態変化表現という捉え方を用いて学習者の誤用を分けることによって誤用の原因がより容易に特定でき、また、正用データが示す傾向の解釈にも効果的である。しかし、他の表現への汎用性は検証が求められる。

4. 結び・今後の展望

本稿では、基礎資料における日本語の複合動詞「～だす」の中国語訳を考察し、中国語動補フレーズとの対応性が高く、直訳できる表現が多く、そして、なぜそれが実現できるのかについて、LCS をもって空間移動の「～だす」「V-出(来) chu1 (lai2)」を分析し、LCS の基本構造の一致と LCS における STATE の一致を要因として仮説を立て、それを顕在化の「～だす」と開始の「～だす」に検証することによって、「～だす」と「V-出(来) chu1 (lai2)」 「V-起(来) qi3 (lai2)」の相違は主として、両言語における動詞の複合体系及び LCS における STATE の拡張のあり様にあると結論付けた。これは、学習者の作文データ及び正用コーパスの調査で二つの側面から実証される。第二言語としての日本語及び中国語の複合動詞・動補フレーズの習得において、両言語の間における動詞の複合体系の相違やそれぞれの LCS における STATE の拡張の在り方が重要となってくる。

他方、影山(1996)、佐野(2017)の理論に基づき、日本語の複合動詞「～だす」は基本的に状態変化を表すと言えよう。実証的なデータにおいて、日本語の「～だす」と中国語の「V-出(来) chu1 (lai2)」 「V-起(来) qi3 (lai2)」の相違は主に状態変化表現に具現しており、それが学習者の誤用傾向及び正用データが示す傾向の要因であると考えられる。本稿の考察では、経路表現と状態変化表現という捉え方が有効性を示している。また、基礎資料における他の複合動詞に対する汎用性がある可能性を提示したが、他の表現への汎用性は検証が求められる。

最後に、今後の課題・展望について触れる。

まず、本論では表面的な現象の観察は対訳・学習者の誤用・正用表現の3つの側面から行い、対訳データ及び学習者の誤用データに関しては、分析資料として基礎資料及び誤用コーパスを利用している。ところが、いずれも構築しはじめたばかりのものであり、初歩段階にあると言えよう。特に、日本語の複合動詞の使用データはほとんどないのが現状である。そのため、データ量がまだ少ない点では改善余地がある。

次に、本稿では、「～だす」と「V-出(来) chu1 (lai2)」 「V-起(来) qi3 (lai2)」の相違は主として、両言語における動詞の複合体系及び LCS における STATE の拡張のあり様にあると結論付けたが、別稿では、その相違が生じる要因は単独動詞の性質の相違であると考え、他の複合動詞に対する汎用性がある可能性を示した。さらに、中国語と英語との対照により、

言語間で動詞の複合の相違は二つの言語の間だけの問題ではなく、一般的な言語学の問題として議論し、単独動詞の性質に由来するものである可能性を提示した。

また、同稿では、同じ状態変化・結果でありながらも、各言語で表す手段が異なることについても触れた。日本語の複合動詞と中国語の動補フレーズ・複合動詞はいつてみれば、状態変化表現のほんのわずかなのである。各言語間の状態変化表現の解明と比較は、対照言語学では大きな課題になるであろう。

これらの問題は第二言語習得に対して大きな意義を持つと思われるが、本研究の考察ではまだ程遠い。

最後に、両言語の間における動詞の複合体系の相違やそれぞれの LCS における STATE の拡張の在り方が重要であること、また経路表現と状態変化表現という捉え方をもって、第二言語習得への提言を試みたが、いずれも理論に偏るものであり、特に、経路表現と状態変化表現という捉え方はどのように教育現場に有効に応用できるかが懸念される。その理論に応じた教授法の開発と実証研究が必要となるであろう。

参考文献

- International Student Center, University of Tsukuba. National Institute for Japanese Language and Linguistics, Lago Institute of Language. . (2013-2015). NINJAL-LWP for TWC. 参照先: NINJAL-LWP for TWC: <http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/>
- TaiH-Y.James. (1985). "Temporal sequence and Chinese word order", In John Haiman(ed.). 著: Iconicity in Syntax (ページ: 49-72). Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins.
- 影山太郎. (1993). 『文法と語形成』. ひつじ書房.
- 影山太郎. (1996). 『動詞意味論一言語と認知の接点一』. くろしお出版.
- 影山太郎. (2013). 「語彙的複合動詞の新体系」. 影山太郎 [編], 『複合動詞研究の最先端一謎の解明に向けて一』. ひつじ書房.
- 監修・制作: 小柳昇, 制作: 崔正熙, ローレンス・ニューベリー・ペイトン, クリコフ・アガタ, ファム・ティ・タイン・タオ, 張正, 劉倩卿. (2017 年 6 月). 「日本語複合動詞多言語翻訳の基礎資料 ver.1」.
- 丸尾誠. (2014). 『現代中国語方向補語の研究』. 白帝社.
- 荒川清秀. (2003). 『一步すすんだ中国語文法』. 大修館書店.
- 佐野洋. (2017). 「時間経過の見方の二重性と言語表現」. 『Japlo YEAR BOOK 2017』, 80-89.
- 佐野洋. (2017.12.10). 『雨量予報, 降水確率とモダリティ』. 一般社団法人 電子情報通信学会 信学技報.
- 朱徳熙. (1999). 『朱徳熙文集』. 商務印書館.
- 松本耀. (1998). 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」. 『言語研究』 114, 329-354.

- 松本耀. (2009). 「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」. 著: 由本陽子・岸本秀樹編, 『語彙の意味と文法』 (ページ: 175-194). くろしお出版.
- 申亜敏, 望月圭子. (2011). 「日本語と中国語の複合動詞の語形成」. 『漢日語言対比研究論叢第二輯』 2 卷 漢日対比語言学研究(協作)会 北京大学出版社, 46-72.
- 曾传祿. (2014). 现代汉语位移空间的认知研究. 著: 齐滬揚, 学思语言学丛书 ; 现代汉语空间范畴的认知与理解. 北京: 商务印书馆.
- 陳劭憚. (2013). 「語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性について―「～出す」を対象として―」. 影山太郎[編], 『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて―』 (ページ: 47-73). ひつじ書房.
- 湯廷池. (1989). 「詞法與句的相關性：漢, 英, 日三種語言複合動詞的對比分析」. 著: 『漢語詞法句法續集』 (ページ: 147-211). 臺灣學生書局.
- 姫野昌子. (1999). 『複合動詞の構造と意味用法』 . ひつじ書房.
- 由本陽子. (2005). 『複合動詞・派生動詞の意味と統語―モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』 . ひつじ書房.
- 刘月华主编. (1998). 《趋向补语通释》. 北京语言文化大学出版社.
- 语料库在线. (2011-2017). 参照先: 国家语委现代汉语语料库:
<http://www.aihanyu.org/cncorpus/index.aspx>

韓国語からみた日本語の複合動詞「V1+こむ」

崔正熙 (チエ・ジョンヒ)

東京外国語大学 大学院総合国際学研究所 博士後期課程

1. はじめに

日本語の「V1+こむ」は、「こむ」に対応する一定の韓国語が存在するわけではなく、「こむ」が持つ独特なニュアンスもわかりにくい上、その意味や用法も多岐にわたっているため、日本語を学習する韓国語母語話者にとっては複合動詞の中でも特に習得に困難を覚えることが多いと言える。発表者はこれまで、「V1+あがる」「V1+あげる」「V1+だす」などについて韓国語との対照研究を行ってきたが、まず、「V1+あがる」「V1+あげる」は、「上昇」の意味を持つ場合は、「V1+oluta (あがる)」「V1+ollita (あげる)」との対応関係が成立し、「完了」の意味を持つ場合は、「oluta」「ollita」を後項動詞とする複合動詞ではなく、違う形式で現れることがわかった。「V1+だす」においても「外部移動」と「顕在化」の場合のみ「V1+nayta (だす)」との対応関係が成立し、「開始」の場合は「nayta」を後項動詞とする複合動詞には対応しないことがわかった。このような傾向は中国語やベトナム語などにおいても同じように現れているという¹。しかしながら、従来の姫野 (1999) のような「完了」や「開始」などといった分類ではこのような全体的な傾向を説明するのには限界があった。そこで、本プロジェクトチーム²では佐野 (2017) の「位置変化」と「状態変化」の二分類からのアプローチを試みている。これは時間の経過を「移動」と「状態」の二つの軸で捉え、「上昇」や「外部移動」などのように位置が変化する場合、複合動詞との対応関係が成立し、空間移動ではなく状態が変化する場合、言語によってそれぞれ異なる形式で表現されるという解釈である。本稿では、このような傾向が「V1+こむ」においても同じように現れるかを考察し、従来の日本語の複合動詞の分類と佐野 (2017) の分類を比較・分析したうえで、新しい分類法として佐野 (2017) の二分類を提案することを目的とする。

2. 「V1+こむ」の韓国語での現れ方

まず姫野(1999)で提示されている「～こむ」の分類法に基づいて韓国語での現れ方を分析し、その結果を踏まえて松田 (2004) と佐野 (2017) の分類法との比較を行う。分析のデータとしては、国立国語研究所の「複合動詞レキシコン」(以降【レキ】と略)と東京外国語大学プロジェクトによる「日本語複合動詞多言語翻訳の基礎資料 ver.1」(以降【基礎資料】と略)の対訳データを用いている。

2.1. 姫野 (1999) の分類法に基づく場合

姫野 (1999) では「V1+こむ」の意味・用法を大きく「内部移動」と「程度進行」の二つに分け、さらに「内部移動」は「閉じた空間」「個体の中」「流動体の中」「隙間のある集合体または組織体の中」

¹ 望月圭子他 (2017) 「多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育第一回研究会資料」, 国際日本研究センター

² 望月圭子先生、佐野洋先生、小柳昇先生率いる東京外国語大学の多言語間の複合動詞研究プロジェクトチーム

「動く取り囲み体」「自己の内部」への移動と「その他」の7つに、「程度進行」は「固着化」「濃密化」「累積化」の3つに下位分類している。また「内部移動」の場合は移動物を「主体」か「対象」かに分けて考察している。その全体像をそれぞれの用例とともに示すと【表1】のようになる。

【表1】 姫野（1999）の「V1+こむ」の意味・用法別分類

大分類	小分類		用例
内部移動	閉じた空間への移動	主体の移動	上がりこむ、落ちこむ、踏みこむ
		対象の移動	押しこむ、叩きこむ、引きこむ、突っこむ
	個体の中への移動	主体の移動	食いこむ、のめりこむ
		対象の移動	塗りこむ、埋めこむ、刷りこむ
	流動体の中への移動	主体の移動	溶けこむ、もぐりこむ
		対象の移動	沈めこむ、漬けこむ
	隙間のある集合体または組織体の中への移動	主体の移動	しみこむ、紛れこむ
		対象の移動	混ぜこむ、織りこむ
	動く取り囲み体への移動	対象の移動	包み込む、丸めこむ、着こむ、かぶせこむ
	自己の内部への移動		くぼみこむ、かがみこむ、折れこむ、畳みこむ、切りこむ
程度進行	固着化		寝こむ、ふさぎこむ、沈みこむ、思いこむ、考えこむ、話しこむ
	濃密化		咳きこむ、冷えこむ、老けこむ
	累積化		歌いこむ、使いこむ、磨きこむ、書きこむ、食べこむ、読みこむ

これらの分類法に従って韓国語との対応関係を分析した結果、「内部移動」に関しては「主体の移動」か「対象の移動」かによって訳し方が異なり、「程度進行」の場合は、複合動詞ではなく、主に副詞（副語的な語句）を用いて「～こむ」の意味を表す場合が多いことがわかった。その内容を次節以下に示す。

2.1.1. 主体の内部移動

【内部移動→閉じた空間への移動→主体の移動】

上がりこむ(마구 들어가다³/makwu tulekata(むやみに入っていく))、落ちこむ(빠지다/ppacita(落ちる))、움푹 들어가다(wumphwuk tulekata/ぺこりと入っていく)、踏みこむ(발을 들여놓다/palul tulyenohta(足を入れておく))、들어가다(tulekata/入っていく))

(1) a. 男が無遠慮に家に上がり込んだ。【レキ】

b. 그 남자가 거리낌없이 집에 들어왔다.

ku namca=ka kelikkimeps-i cip=ey tul-e-w-ass-ta.

その男=NOM はばかりない-ADLZ 家=DAT 入る-CVB-来る-PST-DECL

「들어가다/tule-kata(入っていく)」、「들어오다/tule-ota(入ってくる)」という複合動詞を用いる場合が多く、「마구/makwu (むやみに)」や「움푹/wumphwuk (ぺこりと)」のような副詞との共起も見られる。

【内部移動→個体の中への移動→主体の移動】

食いこむ(파고들다/phako-tulta(掘って入る))、のめりこむ(말려들다/mallye-tulta(巻かれて入る))

(2) a. ロープが手に食い込んだ。【レキ】

b. 밧줄이 손을 파고 들었다.

pascul=i son=ul pha-ko-tul-ess-ta.

ロープ=NOM 手=ACC 掘る-CVB-入る-PST-DECL

「들다(tulta/入る)」を後項動詞とする複合動詞になる場合が多い。

³ 本稿でのハングルのローマ字転写はイェール式を採用している。これはイェール大学のサミュエル・マーティンが考案した朝鮮語の翻字法として、言語学の学術論文などで主に用いられている。

母音: ㅏ [a], ㅑ [ya], ㅓ [e], ㅕ [ye], ㅗ [o], ㅛ [yo], ㅜ [u], ㅠ [yu], ㅡ [u], ㅣ [i], ㅞ [ay], ㅟ [yay], ㅢ [ey], ㅣ [yey], ㅤ [wa], ㅥ [way], ㅦ [oy], ㅧ [we], ㅨ [wey], ㅩ [wi], ㅪ [uy]

子音: ㄱ [k], ㅋ [kk], ㄴ [n], ㄷ [t], ㄸ [tt], ㄹ [l], ㅁ [m], ㅂ [p], ㅃ [pp], ㅅ [s], ㅆ [ss], ㅇ [ng], ㅈ [c], ㅉ [cc], ㅊ [ch], ㅋ [kh], ㅌ [th], ㅍ [ph], ㅎ [h]

【内部移動→流動体の中への移動→主体の移動】

溶けこむ(녹아들다/noka-tulta(溶け入る)), 녹아 들어간다/ noka-tule-kata(溶けて入っていく)), もぐりこむ(기어들다/kie-tulta(這い入る)), 숨어들다/swume-tulta(隠れ入る))

(3) a. 塩が水に溶け込んでいる。【レキ】

b. 소금이 물에 녹아 들어가 있다.

sokum=i mul=ey nok-a-tul-e-ka iss-ta.

塩=NOM 水=DAT 溶ける-CVB-入る-CVB-行く-CVB いる-DECL

「個体の中への移動」と同じように「들다(tulta／入る)」を後項動詞とする複合動詞になる場合が多い。

【内部移動→隙間のある集合体または組織体の中への移動→主体の移動】

しみこむ(스며들다/sumye-tulta(しみ入る)),紛れこむ(섞여 들어간다/sekkye tule-kata(混ざって入っていく))

(4) a. ジュースがスカートに染み込んだ。【レキ】

b. 주스가 스커트에 스며들었다.

cusu=ka sukhethu=ye sumy-e-tul-ess-ta.

ジュース=NOM スカート=DAT 染みる-CVB-入る-PST-DECL

同じく「こむ」は「들다(tulta／入る)」「들어가다/tule-kata(入っていく)」などに対応している。

2.1.2. 対象の内部移動

【内部移動→閉じた空間への移動→対象の移動】

押しこむ(쑤셔 넣다/sswusy nehta(つつついて入れる)),叩きこむ(머리에 넣다/meliey nehta(頭に入れる)),引きこむ(끌어넣다/kkule-nehta(引き入れる)),突っこむ(찔러넣다/ccille nehta(つついて入れる))

(5) a. 彼は子供のポケットにお金を押し込んだ。【レキ】

b. 그 남자는 아이의 호주머니에 돈을 쑤셔 넣었다.

ku namca=nun ai=uy hocumeni=ey ton=ul sswusy-e-neh-ess-ta.

その 男=TOP 子供=GEN ポケット=DAT お金=ACC つつく-CVB-入れる-PST-DECL

「넣다(nehta/入れる)」を後項動詞とする複合動詞になる場合が多い。

【内部移動→個体の中への移動→対象の移動】

塗りこむ(발라넣다/palla-nehta(塗り入れる))、埋めこむ(파묻다/pha-mwutta(彫って埋める))、刷りこむ(인쇄해 넣다/inswayhay nehta(印刷して入れる))

(6) a. 彼らは絵を本に刷り込んだ。【レキ】

b. 그들은 그림을 책에 인쇄해 넣었다.

ku-tul=un kulim=ul chayk=ey inswayha-y neh-ess-ta.

3-PL=TOP 絵=ACC 本=DAT 印刷する-CVB-入れる-PST-DECL

「閉じた空間への移動」と同じように「넣다(nehta/入れる)」を後項動詞とする複合動詞になる場合が多い。

【内部移動→流動体の中への移動→対象の移動】

沈めこむ(빠뜨려 넣다/ppattulye nehta/落とし入れる)、漬けこむ(담그다/tamkuta(漬ける))

(7) a. 彼らは石を湖に沈め込んだ。【レキ】

b. 그들은 돌을 호수에 빠뜨려 넣었다.

ku-tul=un tol=ul hoswu=ey ppattulye-e-neh-ess-ta.

3-PL=TOP 石=ACC 湖=DAT 落とす-CVB-入れる-PST-DECL

【内部移動→隙間のある集合体または組織体の中への移動→対象の移動】

混ぜこむ(섞어넣다/sekke-nehta(混ぜて入れる))、織りこむ(짜넣다/cca-nehta(織り入れる))

(8) a. 豆腐をミンチに混ぜ込みます。【レキ】

b. 두부를 다진 고기에 섞어 넣습니다.

twupwu=lul taci-n koki=ey sekk-e-neh-supnita.

豆腐=ACC みじんぎりにする-ADNC. PST 肉=DAT 混ぜる-CVB-入れる-POL

「流動体の中」と「隙間のある集合体または組織体の中」への移動の場合も同じく「넣다(nehta/入れる)」を後項動詞とする複合動詞に対応する傾向がある。

【内部移動→動く取り囲み体への移動→対象の移動⁴】

包み込む(감싸다/kam-ssata→감다(kamta/包む)+싸다(ssata/包む))、丸めこむ(말아넣다/mala-nehta(巻いて入れる))、着こむ(껴입다/kkye-ipta(重ねて着る))、かぶせこむ(덮어씌우다/tephe ssuywuta/覆ってかぶせる))

(9) a. 暖かい毛布が体を包み込んだ。【レキ】

b. 따뜻한 담요가 몸을 감쌌다.

ttattusha-n tamyo=ka mom=ul kamss-ass-ta.

暖かい-ADNC. NPST 毛布=NOM 体=ACC 包む-包む-PST-DECL

「包み込む」「かぶせこむ」の場合は、ほぼ同じ意味を持つ二つの動詞が、「着こむ」の場合は「重ねる」と「着る」という意味の動詞が、「丸めこむ」の場合は「丸める」と「入れる」という意味の動詞がそれぞれ結合して現れている。

2.1.3. その他の内部移動

【内部移動→自己の内部への移動】

くぼみこむ(움푹 들어간다/wumphwuk tule-kata(深く入っていく))、かがみこむ(웅크려 앉다/wungkhukye ancta(かがんで座る))、折れこむ(접혀 들어간다/cephye tule-kata(折れて入っていく))、畳みこむ(접어넣다/cepe-nehta(畳んで入れる))、切りこむ(깊이 베다/kiphi peyta(深く切る))

(10) a. 本のページが折れ込んでいた。【レキ】

b. 책 페이지가 접혀 들어가 있었다.

chayk pheyci=ka cep-hy-e tul-e-k-a iss-ess-ta.

本 ページ=NOM 折る-PASS-CVB-入る-CVB-行く いる-PST-DECL

⁴ 「動く取り囲み体への移動」の場合、「主体の移動」はなし。

「들어가다(tulekata/入っていく)」と「넣다(nehta/入れる)」が混在している。

【内部移動→その他】

のぞきこむ(들여다보다/tulyeta-pota(のぞき見る))、見こむ(예상하다/yeysang-hata(予想する))、当てこむ(기대하다/kitay-hata(期待する))、(相手チームを)打ちこむ(때려눕히다/ttaylye-nwuphita/叩いて寝かせる))

(11) a. 彼は教室の中を覗き込んだ。【レキ】

b. 그는 고개를 들어밀고 교실 안을 들여다보았다.

ku=nun kokay=lul tulimil-ko kyosil an=ul tuly-eta-po-ass-ta.

3SG=TOP 頭=ACC 入れる-CVB 教室 中=ACC のぞく-CVB-見る-PST-DECL

「その他」の場合は、「들어가다(tulekata/入っていく)」「넣다(nehta/入れる)」などではなく、単純動詞を含む様々な形式に対応している。

「内部移動」の「～こむ」は、全体の傾向として「主体の移動」の場合は들어가다/들어오다 (tulekata/tule-ota(入っていく／入ってくる))または「들다 (tulda/入る)」、「対象の移動」の場合は「넣다 (nehta/入れる)」になることが多い。これは、「こむ」が自動詞とも他動詞とも結合できることに起因するものであり、「主体の移動」においては「自動詞+こむ」の形式で現れることが多いため、韓国語も同じように「自動詞+自動詞 (들어가다/들어오다/들다 (入っていく／入ってくる／入る))」の形式になっている。一方、「対象の移動」は「他動詞+こむ」の形式で現れることが多いため、韓国語においても「他動詞+他動詞 (넣다/入れる)」の形式になっている。次節では「程度進行」について考察する。

2.1.4. 程度進行

姫野 (1999) では、「～こむ」は動作・作用の程度が進行することを表しているとし、その進行の態に従って「固着化」「濃密化」「累積化」の3つのグループに分けている。韓国語への翻訳における傾向を以下に示す。

【程度進行→固着化】

寝こむ(몸져 눕다/molcye nwupta(病気で寝つく))、ふさぎこむ(울적해하다/wulcekhay-hata(憂鬱が
る))、沈みこむ(기분이 가라앉다/kipwun-ka kala-acta(気分が沈む))、思いこむ(굳게 믿다/kwutkey
mitta(固く信じる))、考えこむ(골똘히 생각하다/kolttolhi sayngkak-hata(一生懸命に考える))、話
しこむ(대화에 열중하다/tayhwa-ey yelcwung-hata(会話に熱中する))

(12) a. 妹が失恋でふさぎ込んでいます。【レキ】

b. 여동생이 실연을 해서 몹시 울적해하고 있습니다.

yetonsayng=i silyen=ul hay-se mopsi ulcekhayha-ko iss-supnita.

妹=NOM 失恋=ACC する-CVB とても 憂鬱がる-CVB いる-POL

(13) a. 彼は気分が沈み込んだ。【レキ】

b. 그 남자는 기분이 가라앉았다.

ku namca=nun kipun=i kalaanc-ass-ta.

その男=TOP 気分=NOM 沈む-CVB-座る-PST-DECL

【程度進行→濃密化】

咳きこむ(심하게 기침하다/simhakey kichim-hata(激しく咳する))、冷えこむ(한층
추워지다/hanchung chwuwe-cita(一層寒くなる))、老けこむ(꼭삭 늙다/phoksk nulcta(すっかり老け
る))

(14) a. 彼は咳き込んだ。【レキ】

b. 그 남자는 심하게 콜록거렸다.

ku namca=nun simha-key khollokkely-ess-ta.

その男=TOP 激しい-ADLZ 咳する-PST-DECL

【程度進行→累積化】

歌いこむ(철저히 연습하여 부르다/chelcehi yensuphaye pwuluta(徹底して練習して歌う))、使いこ
む(충분히 쓰다/chwungpwunhi ssuta(十分に使う))、磨きこむ(충분히 닦다/ chwungpwunhi takhta(十
分に磨く))、書きこむ(꼼꼼히 쓰다/kkomkkomhi ssuta(しっかり書く))、食べこむ(잔뜩 먹다/canttuk
mekta(いっぱい食べる))、読みこむ(꼼꼼히 읽다/kkomkkomhi ilkta(しっかり読む))

(15) a. 合唱団は課題曲を歌い込んだ。【レキ】

b. 합창단은 과제곡을 철저히 연습하여 불렀다.

hapchangtan=un kwaceykok=ul chelce-hi yensuphay-e-pull-ess-ta.

合唱団=TOP 課題曲=ACC 徹底-ADLZ 練習する-CVB-歌う-PST-DECL

(16) a. マラソンの前に私はしっかり食事を食べ込む。【レキ】

b. 마라톤 전에 나는 밥을 잔뜩 먹는다.

malathon cen=ey na=nun pap=ul canttuk mek-nunta.

マラソン 前=DAT 私=TOP ご飯=ACC いっぱい 食べる-DECL

以上のように「程度進行」の場合は「～こむ」の持つ意味やニュアンスが韓国語においては、プロセスを修飾し、または程度を強調する副詞によって表現されることが多い。多用される副詞（副語的な語句）としては次のようなものが挙げられる。

【副詞（副語的な語句）の例】여러 번(yele pen/何度も), 철저히(chelcehi/徹底して), 골똘히(kolttolhi/じっくり), 깊숙이(kiphswuki/深く), 깊게(kiphkey/深く), 완전히(wancenhi/完全に), 진지하게(cincihakey/真剣に), 계속(kyeysok/継続して), 몹시(mopsi/とても), 심하게(simhakey/激しく), 뽕뽕이(ppaykppayki/ぎっしり), 간절히(kancelhi/切に), 잔뜩(canttuk/いっぱい), 충분히(chwungpwunhi/十分に), 꼼꼼히(kkomkkomhi/しっかり), 푹(phwuk/じっくり), 골고루(kolkolwe/まんべんなく), 온통(onthong/すべて), 한층(hanchung/一層), 똑똑(phoksak/すっきり), 세게(seykey/強く), 열심히(yelsimhi/一生懸命)など。

上記の用例で見たように「一層」「すっきり」「激しく」など「結果状態の変化」を表したり、プロセスを修飾したりする副詞を用いることで「～こむ」のニュアンスを表すこともできるが、それには限界がある。例えば、「書き込む」「走りこむ」はそれぞれ「꼼꼼히 쓰다/kkomkkomhi ssuta(しっかり書く)」「충분히 달리다(chwungpwunhi talita/十分に走る)」で訳されているが、これだけでは「何らかの目的があってV1の行為を行い、その目的が達成された状態」「結果に結びつくために一生懸命やらなければならないような結果状態」といった「～こむ」の持つ独特なニュアンス（「評価」にあたるもの）が反映されているとは言えない。このような「～こむ」の概念は日本語母語話者の頭の中にある抽象的なものでもあるため、韓国語で言語化することは極めて困難と言える。また、(16)(17)(18)の例からもわかるように文中にすでに程度を強調し、または情態を表す副詞が現れていること

が多く、この場合は「～こむ」と「副詞」のいずれか一つのみが訳出される。日本語文としては意味の重複ではないが、韓国語の訳文においては「～こむ」のニュアンスを言語化するのほとんど副詞が担当しているため、韓国語文ではいずれか一つのみが副詞に反映されるのである。このような結果からも「～こむ」の持つ独特なニュアンスを韓国語では十分表現しきれていないことや副詞による訳出に限界があることがわかる。

(17) 最近、朝晩はかなり冷え込む。【基礎資料】(濃密化)

(18) おいしいスープを作るには、一日かけて弱火でじっくり煮込むことが大切だ。【基礎資料】(累積化)

「内部移動」と「程度進行」の「～こむ」が韓国語への翻訳においてどのような形式で現れるのか、その全体的な傾向を簡単にまとめると【表2】のようになる。

【表2】複合動詞の後項動詞としての「～こむ」とそれに対応する韓国語表現

「V1+こむ」		対応する韓国語表現
内部移動	主体の移動	V1+들어가다/들어오다 (tule-kata/tule-ota(入っていく／入ってくる)) または「들다 (tulda/入る)」
	対象の移動	V1+「넣다 (nehta/入れる)」
程度進行		プロセスを修飾し、または程度を強調する副詞(副語的な語句)+V1

2.2. 松田 (2014) の分類法に基づく場合

松田 (2004) では、V1 と V2 の意味関係に着目して「～こむ」が二格を伴う場合と伴わない場合の二つに分け、さらに A、B、C、D の4つのタイプに下位分類している。

【表3】松田 (2004) の意味分類

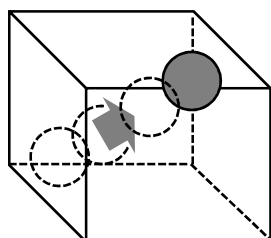
二格を伴う「～こむ」		二格を伴わない「～こむ」	
A タイプ	B タイプ	C タイプ	D タイプ
V1 は「内部移動」 を含意しない	V1 自体が「内部移動」 を含意する	V1 が示す状態への変化 とその状態への固着	V1 の反復行為により生 じる状態変化

飛び込む、呼び込む	入り込む、植え込む	冷え込む、眠り込む	走り込む
-----------	-----------	-----------	------

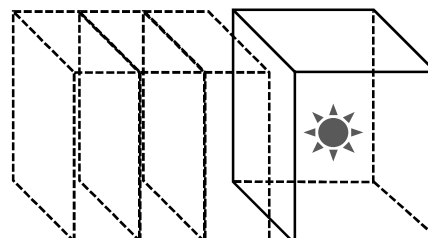
姫野（1999）の分類と比較してみると「二格を伴う場合（A・Bタイプ）」は「内部移動」、「二格を伴わない場合（C・Dタイプ）」は「程度進行」にあたると言える。具体的にはCタイプは「固着化」「濃密化」、Cタイプは「累積化」にあたる。しかし、このような姫野（1999）や松田（2004）の分類は、細分化しすぎており、多言語間での対照研究においては有効な方法とは考えにくい。そこで次節では、もっとシンプルな方法として佐野（2017）の分類法を用いて分析を行う。

2.3. 佐野（2017）の分類法に基づく場合

第1節でも述べたように佐野（2017）は従来の姫野（1999）や松田（2004）とは全く異なる観点からアプローチしており、動きの世界を「位置変化」と「状態変化」の二種類に分類することで、複合動詞についても非常にシンプルな解釈を試みている。例えば「～あがる」「～あげる」が「上昇」の意味を持つ場合は「位置変化」にあたり、曇天から晴天になったことを意味する「晴れ上がる」などは「状態変化」にあたるとした。さらに「状態変化」の場合、変化前の状態は言語コミュニティ内で共有される一般知識や常識を使って推論されることもあり、言語化されることもあると述べている。日本語の場合は、「～あがる」「～あげる」「～だす」「～こむ」などの複合動詞を用いて結果状態のみを言語化し、変化前の状態は推測に任せられるのである。一方、韓国語は変化前の状態（プロセス）を言語化するだけで、結果状態は推論されると言える。佐野（2017）の分類を姫野（1999）・松田（2004）と比較すると、単空間で外形は変化せず、位置が変化することで時間の経過を表現する「位置変化（図1）」は、姫野（1999）の「内部移動（一部を除く）」、松田（2004）の「Aタイプ」にあたり、外形を含めた性質や属性の違うモノが存在する連続体としての単空間が複数連鎖することで時間の経過を表現する「状態変化（図2）」は、姫野（1999）の「内部移動の一部」と「程度進行」、松田（2004）のB～Dタイプにあたると思われる。Bタイプは「位置変化」と「状態変化」の境界にあるとも言えるが、「入り込む」「植え込む」は単なる位置の変化ではなく、「～こむ」の持つ独特な空間、そのモードに入ることを意味し、その結果、図2のように状態が変化すると捉えることができる。



佐野（2017b）図1 経路表現



佐野（2017b）図2 状態表現

以上の分類の比較結果を表で示すと【表 4】の通りとなる。

【表 4】佐野（2017）と姫野（1999）・松田（2004）との比較

姫野（1999）の分類		松田（2004）の分類	佐野（2017）の分類
内部移動 （主体の移動／対象の移動）		A	位置変化
		B	状態変化
程度進行	固着化	C	
	濃密化		
	累積化	D	

3. まとめと今後の課題

以上の考察からわかった点を次のようにまとめることができる。

- ① 「～こむ」は「～あがる（oluta）」「～あげる（ollita）」「～だす（nayta）」とは異なり、一定の対応語が韓国語には存在しない。そのため、韓国語への翻訳においては様々な形式で現れる。全体の傾向としては「内部移動」、つまり「位置変化」を表す場合は、「들어가다/들어오다/들다（tule-kata/tule-ota/tulta（入っていく／入ってくる／入る）（主体の移動）」、または「넣다（nehta/入れる）（対象の移動）」に対応することが多い。
- ② 「程度進行」の「～こむ」、つまり「状態変化」を表す場合は、「副詞（副語的な語句）＋V1」で現れることが多く、プロセスを修飾し、または「結果状態の変化」を表す副詞で一部対応はしているものの、「～こむ」のニュアンスが十分表現できているとは言えない。日本語は複合動詞を用いて「状態変化」を表すことができる反面、韓国語は「状態」ではなく、プロセスに焦点が当てられているため、そのプロセスに基づいて結果状態を推論する（佐野（2017）における「演繹推論」）仕組みの言語と言える。
- ③ 本稿では姫野（1999）の分類に従って考察を行い、その結果から佐野（2017）の「位置変化」と「状態変化」の二分類に基づく解釈のほうがより妥当でシンプルであるだけでなく、他の言語に対しても共通の説明ができる方法であることがわかった。つまり、韓国語だけでなく、中国語やベトナム語などに対しても言える共通の特徴は、「位置変化」を表す場合は、一定の形式での対応が見られるが、「状態変化」の場合はそれを表現するツールが言語によって異なるという点である。佐

野(2017)でも「位置変化」は言語化しやすく、「状態変化」は言語コミュニティによって表現方法が異なると指摘している。

- ④ 「～こむ」は独特な空間を持ち、その「こむ」モードに入ると元には戻りにくいという特徴がある。
松田(1989)においても「～こむ」は次のような意味を持っていると述べている。

先行動詞の表す動作や状態をとることによって、ある状況へと入っていく意識であるが、「プールに飛び込む」のように、ある領域へと入っていく場合と、「じっと考え込む」のように、その動作・状態をより深い域へと進め入れる場合とがある。(森田 1989:452p)

このように「こむ」モードが持つ独特な世界やニュアンスは日本語母語話者の頭の中に概念として存在するものであり、それを学習者に説明し、理解させることは極めて難しい。しかしながら日本語教育の観点から、この「こむ」モードを解明し、より具体化することが今後の課題と言える。

【略語一覧】

ACC	Accusative	対格	NPST	non-past	非過去
ADLZ	Adverbializer	副詞化	PASS	Passive	受動形
ADNC	adnominal clause	連体節	PL	Plural	複数
ADVC	adverbial clause	連用節	POL	Polite	丁寧
COP	Copula	指定詞	PST	Past	過去
CVB	Converb	副動詞	QUOT	Quotative	引用
DAT	dative(-locative)	与(位)格	SG	Single	単数
DECL	declarative	叙述	TOP	Topic	主題
GEN	Genitive	属格	3		3人称
LOC	Locative	位格	-		接辞境界
NOM	nominative	主格	=		接語境界

【参考文献】

韓国語で書かれたもの

Kim ilpyeng. 2000. “kwuke hapsenge yenkwu” [国語合成語研究], Seoul: Yeklak.

Park tekyu. 1998. “kwukeuy tongsasang yenkwu” [国語の動詞相研究], Seoul: Hankwukmwunhwasa.

Son seymotol. 1996. “Kwuke pocoyongen yenkwu” [国語補助用言研究], Seoul: Hankwukmwunhwasa.

日本語で書かれたもの

影山太郎(2013)『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』, ひつじ書房.

佐野洋(2017a)「時間経過の見方の二重性と言語表現」, pp.322-331, 『Japio YEAR BOOK 2017』, 日本特許情報機構.

佐野洋(2017b)「雨量予報, 降水確率とモダリティ」, 『信学技報』, 電子情報通信学会.

姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』, ひつじ書房.

松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究: 認知意味論による意味分析を通して』, ひつじ書房.

望月圭子他(2017)「多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育第一回研究会資料」, 国際日本研究センター.

【用例の出典】

小柳昇他「日本語複合動詞多言語翻訳の基礎資料 ver. 1」(2017年6月)

国立国語研究所「複合動詞レキシコン(日本語複合動詞辞典)」<http://vvlexicon.ninjal.ac.jp>

【辞書類】

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』, 角川書店

「V～こむ」の分類を再考する

Laurence Newbery-Payton (ローレンス・ニューベリーペイトン)

東京外国語大学 大学院総合国際学研究科 博士後期課程

1. はじめに

本発表は従来提案されてきた「V～こむ」の分類を批判的に考察して、より一般性のある分類を試みる。具体的に、松田（2004）の提案に対して、「V～こむ」の用法が「位置変化」と「状態変化」に分けられることを示す。さらに、「V～こむ」の用法が全てある種の状態変化を表すことを明らかにする。

2. 典型的な「V～こむ」の分類

姫野（1978）は「～こむ」の用法を大きく「内部移動」と「程度進行」という2つに分けている。日本語教育を重点においた研究であるが、日本語学習者にとって必ずしも理解しやすい分類になっていない。用法の過剰な細分化もあげられるが、本発表にとって最も関連のある問題点として、姫野（同上）の分類では「内部移動」と「程度進行」の関係が十分明白にされていないと言える。

3. 松田（2004）による「V～こむ」の分類

「V～こむ」の用法を全て1つの枠組みで捉えようとするのが松田（2004）の研究である。以下、松田（同上）が提案した「V～こむ」の分類を概観する。

松田（2004：89）は「V～こむ」の基本的な意味を「～の中に入る／入れる」と「その場に留まる／留める」としている。この2つの意味はそれぞれ図1の $[\alpha]$ と $[\beta]$ で示されている。 $[\alpha]$ $[\beta]$ のどちらが焦点化されるかによって「V～こむ」が表す意味が変わってくる。図1は「V～こむ」の「コア図式」を示している。すなわち、全ての用法が図1から派生させているとしている。

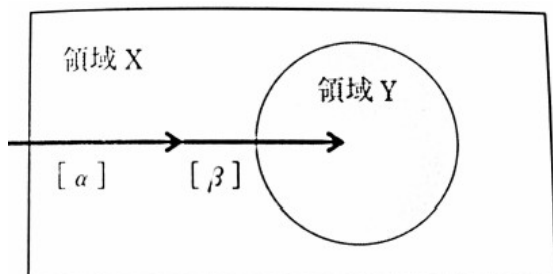


図1 「～こむ」のコア図式（松田 2004：75）

姫野（1978）が名詞の形態を重視した下位分類を提案しているのに対して、松田（2004）は第1に「～こむ」が二格名詞を伴うか否かを基準にその用法を分けている。そのうえで二格を伴う「～こむ」

と二格を伴わない「～こむ」をその意味的特徴によって二分し、合わせて4つの下位分類を認めている。本発表では松田（同上）に従ってそれらをA～Dタイプと呼ぶことにする。松田（同上）は各タイプを図1から派生したイメージ図式によって解説している。

Aタイプは「飛びこむ」や「持ち込む」のように「内部移動」を表さない前項動詞に「～こむ」が付加されることによって複合動詞全体が内部移動を表す場合である。この過程を図式で表すと、「領域X」への内部移動を表す $[\alpha]$ の部分が焦点化されることになる（図2）。

- (1) 彼は橋の上から川に飛び込んだ。
- (2) このサイズのかばんは機内に持ち込むことはできない。

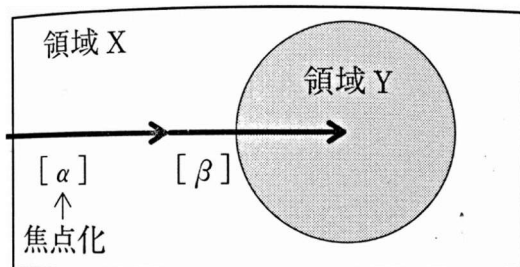


図2 Aタイプ「～こむ」のイメージ図式（松田2004：77）

一方、Bタイプでは「埋めこむ」や「包みこむ」のように前項動詞は既に「内部移動」を含意している。松田（2004）が指摘しているように、Bタイプの複合動詞における「～こむ」の使用は重複的に思えるため日本語学習者にとって理解が困難であると考えられる。Bタイプでは、 $[\alpha]$ は前項動詞が表しているため「～こむ」によって焦点化されるのは $[\beta]$ のほうである（図3）。

- (3) この商品にはマイクロチップが埋め込まれていて、消費者はスマホを使って商品の情報を見ることができる。
- (4) このマッサージチェアは、手足をやさしく包み込むんで気持ちよくマッサージしてくれる。

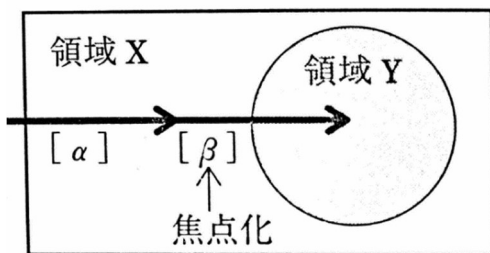


図3 Bタイプ「～こむ」のイメージ図式（松田2004：82）

続いて、二格を伴わない「V～こむ」の下位分類を考察する。松田（2004：85）はCタイプを「V1が示す状態への変化とその状態への固着」と特徴づけている。Bタイプにあった「しっかり、きちんと、奥深く」という意味合いが抽象化された用法である（この抽象化を表すために図4では領域Xは破線で囲まれている）。例えば、「冷えこむ」や「寝こむ」は「非常に冷える」や「ずっと眠る」というように言い換えることが可能である。なお、Cタイプは姫野（1978）の「固着化」「濃密化」に相当している。

- (5) 最近、朝晩はかなり冷え込む。
 (6) 息子は風邪をこじらせて3日間寝込んでいた。

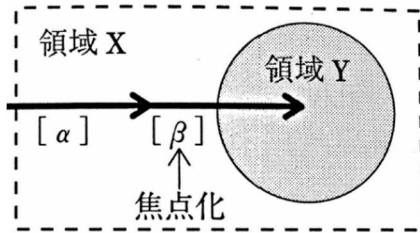


図4 Cタイプ「～こむ」のイメージ図式（松田 2004：85）

DタイプはCタイプと同様に状態変化（抽象的な移動）を表すが、Dタイプの場合状態変化がV1の行為によって生じ、その多くの場合行為の反復が含意されるという。図5では「走る」の例であるが、「走る」という行為の繰り返しのによってもたらされる状態は「満足できる状態」（領域X）及び「目標が達成できる状態」（領域Y）という（松田 2004：87f）。また、行為の反復以外に、(8)のように長時間継続する行為もDタイプとされている。

- (7) 夏合宿でかなり走り込んだおかげで、足腰が鍛えられた。
 (8) おいしいスープを作るには、一日かけて弱火でじっくり煮込むことが大切だ。

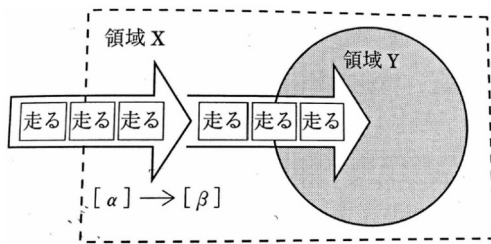


図5 Dタイプ「～こむ」のイメージ図式（松田 2004：87）

以上、松田（2004）による「V～こむ」の分類を概観した。A～Dタイプの特徴と松田の例を表1にまとめる。

表1 「V～こむ」の意味分類（松田 2004: 110）

二格（～の中に）を伴う「～こむ」		二格を伴わない「～こむ」	
Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ	Dタイプ
V1は「内部移動」を 含意しない	V1自体が「内部移動」 を 含意する	V1が示す状態への変 化とその状態への固 着	V1の（反復）行為に より生じる状態変化
例）飛びこむ、 呼びこむ	例）植えこむ、 埋めこむ	例）冷えこむ、 眠りこむ、老けこむ	例）十分に走りこむ

4. 松田（2004）の問題点

松田（2004）は「～こむ」の用法を1つの枠組みで捉えたことは確かであるが、以下の問題点もはらんでいる。

1. 多義性の問題と個別の動詞の分類
2. ニ格の有無に対する見解
3. A～Dタイプの間の関係
4. 分類の不統一性

4.1. 多義性の問題と個別の動詞の分類

松田（2004）は「走りこむ」がAタイプとしてもDタイプとしても捉えられるということには言及しているものの、多義性の問題の一般論に十分取り組んでいるとは言い難い。多義性は「走りこむ」に限った現象ではなく、多義性を有するその他の動詞の扱いについて考慮する必要があると思われる。「塗りこむ」「教えこむ」はそれぞれAタイプとBタイプとされているが、両方ともDタイプとして解釈することもできる。「走りこむ」に反復的行為の解釈を認めるのであれば、「塗る」ことや「教える」ことも同様に、通常行為の繰り返しを必要とすると考えるのが自然であろう。また、「教える」が抽象的な移動を表している（「知恵」などが物理的に移動しない）とすれば、Dタイプに分類されるはずである。

(9) 看護婦は傷口に薬を塗り込んだ。

(10) 子供に勉強を教え込んだ。

（複合動詞レキシコン）

4.2. ニ格の有無に対する見解

松田（2004）はニ格の有無を最大の分類基準としているが、ニ格の性質は決して一枚岩とは言えない。(11)のような着点のニ格もあれば、(12)のように着点よりも存在場所を表すニ格もある。(13)のようなニ格は着点として捉えるには無理があるであろう。また、松田（2004:85）はCタイプについて、「ニ格が省略されている」というように説明している。したがって、ニ格の有無は意味的な基準ではなく形態的な基準と考えられる。一方、下位分類においては意味的な分類基準が設けられている。本発表では形態的な性質にとらわれずに意味に基づく分類を試みる。

(11) ショルダーバッグのベルトが細くて、肩に食い込んで痛かった。

(12) 彼はトラブルの処理のため会社に泊まり込んで仕事している。

(13) 彼は客の苦情に困りこんでいた。

（複合動詞レキシコン）

4.3. A～Dタイプの間の関係

松田（2004:184）によればDタイプは「AタイプとCタイプが結合した形での派生用法」であるが、

「多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育」第3回研究会

そう述べる理由は不明である。C タイプは () のように無意志動詞化という特徴があるが、D タイプが表す「目的のため（「満足できる状態」に向かって）反復的にまたは長時間にわたってその行為を熱心に行う」（下線：原文）意味とは性質が異なる。5 節で述べるように、D タイプはむしろ B タイプと類似していると捉えたほうが適切であると考えられる。

(14) 彼はさっきからずっと何か考えこんでいる。

(松田 2004 : 182)

4.4. 分類の不統一

最後に、表 1 で示した分類は統一性に欠けていると思われる。A タイプ及び B タイプの説明は前項動詞の性質を述べたものであるのに対して、C タイプ及び D タイプの場合、説明は後項動詞つまり「～こむ」自体の働きについて述べたものであることに注意されたい。換言すれば、A～D タイプの分類が同一に行われていないのである。

松田 (2004) は (姫野 (1978) と同様に) A タイプのような、二格を伴う物理的な内部移動の「V～こむ」が典型であるという立場をとっていると言える。C タイプ及び D タイプが表す状態変化は、物理的な内部移動を抽象化したものである、ということになる。このように主張するのであれば、C タイプ及び D タイプの説明文を A タイプ及び B タイプのそれと並行させて、その関係性をより明白にすべきなのではないか。以下、表 1 を修正して表 2 として再掲する（修正の箇所は灰色にしてある）。そうすれば、i. 前項動詞が内部移動か状態変化か；ii. 「～こむ」が内部移動・状態変化を表すか「固着」を表すかという 2 つの基準で A～D タイプを簡潔に分けることができる。

表 2 松田 (2004) による「V～こむ」の意味分類の修正案

二格（～の中に）を伴う「～こむ」		二格を伴わない「～こむ」	
A タイプ	B タイプ	C タイプ	D タイプ
V1 は「内部移動」 を含意しない	V1 自体が「内部移動」 を含意する	V1 自体が「状態変化」 を含意する	V1 は「状態変化」 を含意しない
「～こむ」は内部移動 を表す	「～こむ」は内部移動 の固着を表す	「～こむ」は状態変化 の固着を表す	「～こむ」は状態変化 を表す
例) 飛びこむ、 呼びこむ	例) 植えこむ、 埋めこむ	例) 冷えこむ、 眠りこむ、老けこむ	十分に走りこむ

表 2 では松田 (2004) が主張する「～こむ」の 2 つの意味がはっきり分けられ、表の右側 (C タイプ及び D タイプ) が表の左側 (A タイプ及び B タイプ) の抽象化であることも学習者にとっても捉えやすくなるであろう。しかし、この修正は、A～D タイプが等位であるという大前提に立っている。次節では、この前提に立たない「V～こむ」の分類を提案する。

5. 松田（2004）の再分類

本節では松田（2004）とは別の観点から「V～こむ」の分類を試みる。以上述べたように、二格の有無は必ずしも本質的な基準とはかぎらない。また、A～D タイプが等位に並ぶのかも議論する余地がある。本発表では意味のみを基準に「～こむ」の分類を目指して、まず「V～こむ」の用法を内部移動と状態変化に分類することにする。この分け方は、変化を表す言語形式が位置変化と状態変化に分類可能である、という佐野（2017a、2017b）の理論に負う。

「V～こむ」が表す位置変化は内部移動であるが、内部移動に相当するのは松田の A タイプである。その他のタイプは全て何らかの状態変化を表していると言える。松田（2004）の提案を一部受け継いで、状態変化の下位分類として B タイプと C タイプを分けるが、これは概ね意志動詞と無意志動詞の区別に帰する（タイプ C に意志動詞が表れた場合に無意志同化が生じることは上述した通りである）。

内部移動（松田の A タイプ）にも意志動詞（「飛びこむ」など）と無意志動詞（「転がりこむ」など）の両方が存在し、分類の対称性を示すために、状態変化と同様に内部移動の下位分類として意志動詞と無意志動詞の 2 つを設定しておく。

最後に、D タイプをどのように分類すればよいかという問題に直面する。本発表は、D タイプが B タイプの特殊な例とみなす。D タイプは B タイプと同様に意志動詞による状態変化を表す。ところが、B タイプの動詞とは異なり、D タイプの前項動詞はそれ自体が状態変化を表さない（表 2 も参照）。例えば、タイプ B の「埋め込む」では「埋める」の一回的な行為は既に状態変化を引き起こすと捉えることができる（行為の対象は「埋もれていない」状態から「埋もれている」状態へと変わっていく）。一方、D タイプの「走りこむ」では、「走る」という一回的な行為によって状態変化が生じるとは捉えがたい（二格を伴う「走る」については後述する）。そのため、状態変化が捉えられるように V1 の再解釈が行われると仮定する¹。松田（同上）があげている例の多くは反復行為であるが、「煮こむ」のように長時間にわたる行為でもかまわない。いずれの場合でも時間の経過が必要とされるのである。

本発表の暫定的な提案を図 6 で示す。この体系は 3 層に分けられていると言える。第 1 の分類基準は、「～こむ」が内部移動を表すか状態変化を表すかである。第 2 に、前項動詞が意志動詞か無意志動詞かによってさらに分かれる。第 3 に、状態変化を表す意志動詞の中の特殊なタイプとして D タイプが位置される。すなわち、松田（2004）の分類において等位に並ぶ A～D タイプは実は 3 つのレベルに位置しており、等位に並ぶのは B タイプと C タイプのみである。

¹ Jackendoff（1991：15）が指摘しているように、英語では以下のように瞬間的な動作が時間の継続を表す表現と共起する場合、その意味的なずれを解決させるために動作が反復すると再解釈される。「走りこむ」などの D タイプ用法にも同様の現象が生じると考えられる（Walková（2013:27）も参照）。

i. The light flashed.（瞬間的動作）

ii. The light flashed until dawn.（「夜が明けるまで」という意味が反復解釈を促す）

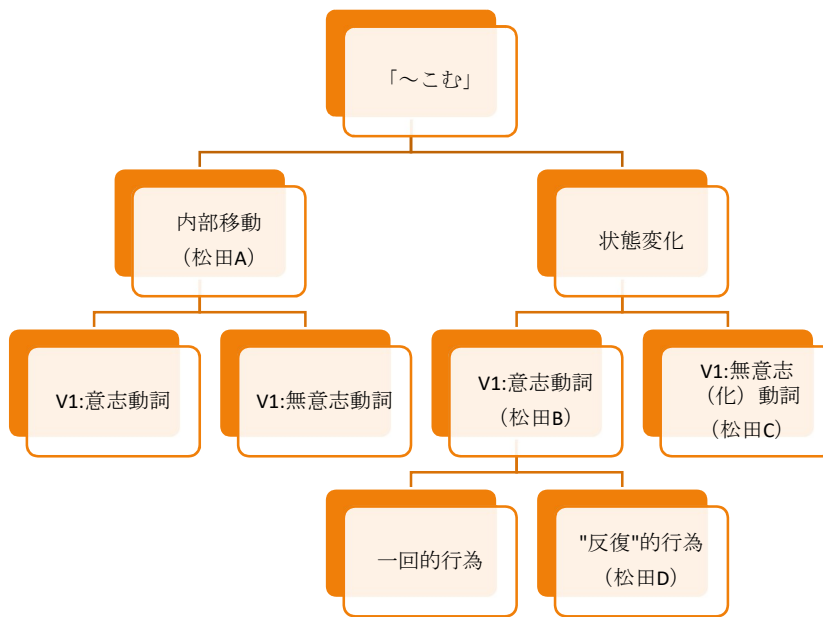


図6 「内部移動」と「状態変化」を軸にした「V～こむ」の分類

図6と松田（2004）の分類の最も重要な相違点は、二格を基準にしないことによってB～Dタイプの意味的な類似性及びDタイプが見えてきた、ということにあると考えられる。次節では図6を基に、「状態変化」を中心とした「V～こむ」の分類を提案する。

6. 「状態変化は移動の抽象化・拡張」を超えた理論に向けて

図6で示したように、「V～こむ」の多くの用法は状態変化を表すが、観点を変えれば内部移動も状態変化の一種とみなすことができるのではないかと考えられる。松田のタイプAの実例を再考すると、それらは内部への移動を表しているわけであるが、それと同時に、「外に存在する」という状態から「中に存在する」という状態への変化でもある。「V～こむ」が表す移動事態は全て、いわば境界線を越えるものであるため、状態変化としても容易に解釈できる。松田（同上）が目指した「V～こむ」の意味的連続性が状態変化に求められると考えるのである。

「V～こむ」の体系を修正して図7で示す。状態変化が上位概念になった以上、本発表ではその下位分類の内部移動と状態変化をそれぞれ「外的状態変化」と「内的状態変化」と呼ぶことにする²。「外的」「内的」は境界線を越える移動事態における「外」と「中」のことを指していないことに注意されたい。「内的状態変化」は「体が冷えこんだ」のように物の属性や性質が変わるような状態変化を指す。一方、「外的状態変化」は「鳥が部屋に飛びこんだ」のように物の属性や性質は変わらず、外（他）との関係が変わることによってもたらされる状態変化を指す。

² Tenny（1994:127）に対する Walková（2013: 89ff.）の以下の指摘に影響を受けた発表者の用語であるが、Tenny（同上）と同一の概念を指しているわけではない。

Tenny（1994: 127） makes it clear that objects moving in space, e.g. *the train crossed the border*, undergo an external, not internal, motion, and as such are not affected event participants.

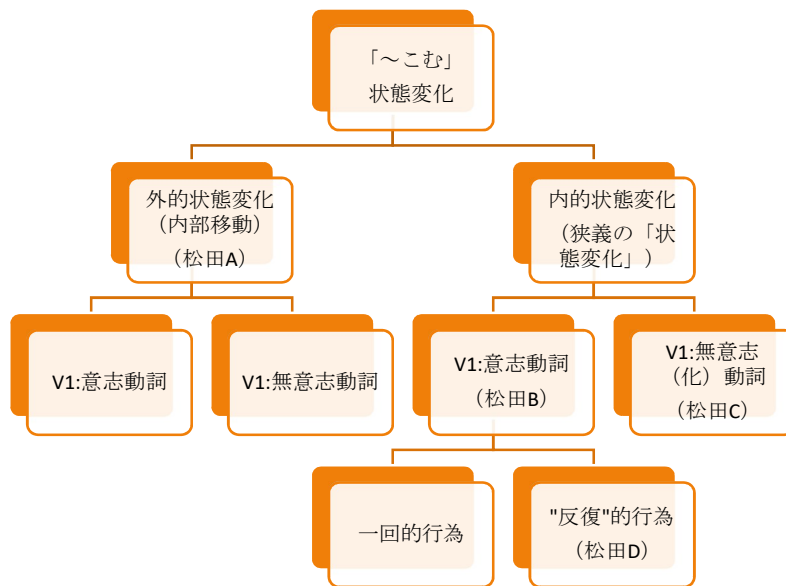


図7 「状態変化」を中心とした「V～こむ」の分類

ここで、松田（2004）が重視した二格の問題に振り返る。複合動詞全体の意味特性を重視した本発表の立場では、二格は本質的な分類基準ではないと考える。むしろ、二格の顕在化は状態変化が生じたことを示すための手段の1つである。例えば、「走る」はそれだけでは状態変化を引き起こすとは考えたいが、着点の二格名詞を付加することによって、境界線を越える内部移動事態すなわち外的状態変化になる。着点が明示されていなければ、走る行為が状態変化に及ぶと解釈するためには、上述したような反復解釈が必要になる。

また、本発表でいう内的状態変化を表す「～こむ」には、主観的な意味が含まれるものがあるが、この現象をどのように説明すればよいのであろうか。「～こむ」の使用には何らかの状態変化が生じることが必要であるが、外的状態変化は基本的に物理的な事態を表しているため、知覚しやすい。一方、内的状態変化の場合、状態変化が生じたという明白な証拠があるとは限らない。何度なら「冷えこむ」と言ってもよいか、という客観的な基準はないであろう。「(十分に) 走りこむ」も、個人個人の判断が基準になるしかない。このように主観的な意味は反復の解釈と同様に、「～こむ」の使用を動機付ける、話者の認知活動であると考えられる。

図6及び図7では、松田（2004）との対照を行う目的もあり、「V～こむ」の下位分類が相補的な分布をなしているかのように提示されているが、松田（同上）も述べているように、「～こむ」の用法は完全に分けられるわけではない。本発表の提案を修正してより適切な体系をつくることが今後の課題の1つである。

7. まとめと今後の課題

本発表では松田（2004）を中心に、従来の「～こむ」の分類を批判的に考察したうえで、より一般性を目指した分類を提案した。以下、本発表の主張を簡単にまとめる。

1. 「V～こむ」は状態変化を表す。
2. 状態変化の性質は前項動詞の語彙的意味によって決まる。
3. 前項動詞の行為が状態変化に及ぶと捉えがたい場合、明示的な装置（ニ格名詞など）または暗示的な装置（反復の再解釈など）がはたらく。
4. 従来位置変化とみなされてきた「～こむ」は状態変化の一部（外的状態変化）として捉えられる。

以上の分析が妥当であるとすれば、日本語の複合動詞がなぜ他言語に訳出しにくいのか、どのように日本語学習者に効率的に複合動詞を習得させればよいのかといった問題に光を当てることができると期待される。今後の課題として、位置変化を状態変化とみなす条件が何か、他の複合動詞が同様の枠組みで分析できるか、主観的意味をどのように形式化できるか、といったことがあげられる。

参考文献・資料

- 姫野昌子（1978）「「～こむ」および内部移動を表す複合動詞類」姫野（1999）『複合動詞の構造と意味用法』59-82. ひつじ書房
- Jackendoff, Ray（1991）Parts and boundaries. in Levin, Beth and Steven Pinker（eds）*Lexical & conceptual semantics*. Cambridge; Oxford: Blackwell. 9-45.
- 影山太郎編（2013）『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』ひつじ書房
- 国立国語研究所（2015）「複合動詞レキシコン」参照先: <http://vvlexicon.ninjal.ac.jp/>
- 松田文子（2004）『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して—』ひつじ書房
- 睦俊秀（2012）「「程度進行」の意味をもつ複合動詞「V1+こむ」の意味と構造に関する考察」峰岸真琴、稗田乃、早津恵美子、川口裕司（編）『コーパスに基づく言語学教育研究報告 8 コーパスを用いた言語研究の可能性 IV』東京外国語大学大学院総合国際学研究院グローバル CEO プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」185-208
- 佐野洋（2017a）「時間経過の見方の二重性と言語表現」Japio YEAR BOOK 2017 日本特許情報機構 322-331
- 佐野洋（2017b）「雨量予報、降水確率とモダリティ」信学技報 117:341 25-30
- Tenny, Carol（1994）Aspectual roles and the syntax-semantics interface. Dordrecht; Boston: Kluwer Academic.
- Walková, Milada（2013）The aspectual function of particles in phrasal verbs. Gronigen Dissertations in Linguistics 118.

多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育 第三回研究会

東京外国語大学 国際日本研究センター 国際日本語教育部門

坂本恵、伊集院郁子、大津友美、佐野洋、鈴木智美、鈴木美加、宮城徹、望月圭子

Copyright (C) 2018 International Center for Japanese Studies. All rights reserved.

国立大学法人 東京外国語大学 国際日本研究センター